海國兵談第五

夜軍

仙臺　林子平述

夜の戦ハ陣所江寄ルを夜討ト云城江寄ルを夜込ト云、互ニ陣を取て夜出て戦フを夜軍ト云ト世上ニ云習ハセリ其中、夜討ト夜軍トハ少シ替レリ夜討ト夜込トハ大なる差別なし

○夜ハ敵の容子も分明ならざれバ足場の善悪、旌旗の相圖も慥ニ見分難ク敵味方もさだかニ知レ難キものなれバ諸事ニ不都合なる故、十ニ

八九ハ夜の戰をバ好ミざる事也然ト云ども夜討ハ勝難キ敵ニ勝事あるものなり然レバかね〱約束十分ニ調ハざれバ只彼是（カレコレ）トひしめくばかりにて戰も仕かたきもの也ト云リ此故ニ相圖の鳴物、相印、相詞等を能く呑込スへ志ましは夜戰の大趣意ハ旌旗の相圖ハ見へ難キ故鳴物の相圖を嚴ク定ムへし鳴物の相圖とハ東西南北の鳴物を定メ教ル事也たとへバ柏子木（ヒヤウシキ）を東の鳴物、太鼓を南、貝を西、喇叭を

此外定[illegible]ク如ク平生の操練ニ此趣を能呑込セ置て事ニ臨て闇違のなき様ニすへし此外松明（タイマツ）、大薄（ハナビ）等工夫次第定ムへし

●夜戰ハ人數の編伍（クミアイ）を慥ニ為へし編伍たしかならさる時ハ引取時敵より、まきれ者附纏フて來ル事あり此まきれ者を防ク術ハ編伍正キニあらされバ叶難キ也和田楠ハ夜討ニて帰て立スグリ、居スグリといふ事を為て敵のまきれ者を見出したる事あれとも人數組

正キ時ハ立スグリ居スグリにも不レ及して紛レ入ルべき様なりと知べし

○夜戦ハ人數を二十五人宛幾組も仕立て各一組切の働を為（ナサ）しむる事甚便利也

○夜討を仕てハ懸りたる所よりハ不レ帰、脇ゟ裏かへ切抜（ヌケ）てかくるべし

○夜討夜合戦とても戦場より一町許退イて忍備を一備も二備も出し置べし万一味方敗北して敵追來ラも己レが備の前を敵勢の半（ナカバ）過（スキ）たる時切懸て踏崩スべし其時引來ル味方も返シ合て挾ミ討べし

○夜軍の習ハ前鉄炮の音を相圖に働入べし

○夜討ハ何方より入て何方江抜ルト云事を能諸人に呑込スべし抜（ヌケ）て帰ルべき道江ハ迎備（ソナヘ）を出シ置べし、亦帰ル間數方江ハ松明等少く出シて敵の氣を疑ハしむる事ある也

○夜の印（シルシ）ハ白色を用べし胴巻、腰巻、鉢巻、袖印、鞘巻等心次第なるべし

○夜討ハ轂ヲ揚ル事ヲ禁ズ若轂ヲ揚ル者あらば即坐に切捨にすべし此故に古ハ枚(バイ)を含ムト云事ありて楊枝の大サなる木を人毎に含マセ或ハ馬の轡を結ぶる事ある也

○夜討の習ヒハ敵陣江入ト等ク先大将の坐を目懸て切込べし其次ハ敵の馬を切放シて騒動させ其次ハ早ク火を懸て焼立べし勿論一所にて働かバ組合次第十人二十人ずつ所々にて働べし首ハ切捨也但シ大将の首ト見ば捨ル事なかれ太刀具足迄も分捕して帰ルべし扨又馬を切放シ火を懸ル事を人々心懸ル時ハ接戦の働次(ツギ)になるもの也然ル故に切放シ火附等の役ハ戦士の外に三四人を一組トして五組も十組も二十組も備次第に用べし扨右の者ども馬を放シ火を懸終(オハ)ラバ是も戦士ト等ク戦べし

○夜討の出立ハ飛道具を多ク不用、手詰の働を第一ト心懸べし

○敵を追崩さで長追する事なかれ金を聞次第惣戦士足を止ムへし扨旗馬印の代りに松明十本将机に振立へし是を目當に惣軍一所に集ルへし勿論陣營を策取るに於てハ敵陣に有合フ兵器諸道具手に懸り次第取來ルへし

○柵を厳く振たる所ハ鋸にて土際より引切推倒して込入へし此働ハ時宜に因て昼も為へき、但昼ハ仕寄道具を用べし

○夜討の時火附役の者ハ乾キたる柴萱（カヤ）など四五把づゝ持行て陣營の中、火の附易キ所を見立て彼ノ柴を積累て火を附へし火を附ルにハ火船の條に出セル焼草込タル大薄（スヽキ）ノ花火ヲ用へし

○夜討を為べき圖四有、敵の折着の夜、終日合戦ありし夜、大風雨雪の夜、敵方吉凶に付て騒動ありし夜ハ、猶此外臨時に考て討へき圖を討て神速に討懸ルへし

夜討ニ用べき器械左ニ記ス

○階子（ハシゴ）是ハ塀堀或ハ長屋等ヲ越ニ用

○大槌（オヽツチ）是ハ營門等ヲ打破ルニ用

○大鋸是ハ柵塀柱等ヲ引切ニ用

○熊手（クマテ）并大鳶嘴（トビクチ）是ハ乗越（ノリコシ）の具ニも用ヒ或ハ力戰ニも用

○紫萱大薄（スヽキ）の花火是ハ火附道具之

右夜討の大略之猶工夫ある へし此下夜討ヲ防クべき条々二三ヲ記ス猶又不簡ヲ加て防キの手あてをなすへし

○夜討ハ空隙（スキマ）ヲ討之ヘハ己（オノレ）ニ空隙なき時ハ何ぞ夜討ニ逢事あるへき扨己ニ空隙なき樣ニする事ハ第一物見ヲ能用へし物見密（シゲキ）なる時ハ敵の寄附（ヨリツク）へき樣なし其次ハ軍法約束正クして一タヒ夜討の寄來ル相圖ある時ハ營中悉ク防キの用意ヲ爲（スル）事ヲ精ク教置へし其次ハ營中の戰士の中ニて己（オレ）ハ不戰して松明の役ト云者ヲ定メ置へし夜討來ルの相圖ある時

ハ已レハ不戦して早ク松明を、ともし一面々の小屋の前並に営中の小路々を照して営中を白日の如クに成べし惣して夜討ハ暗（ヤミ）に乗して少人数にて蹶立ルもの、然ルに営中白日の如クなりなば決して夜討に苦メらるゝ事なかるべし是夜討を防ク第一の心懸なるべし是等の事を能會得せば妄りに夜討にハ逢間敷べし此外猶工夫を附て防禦の術を為べし将帥たる人能々心を用べし都て夜討ハ不慮の大功を成ものなれども齊の田単ヵ燕軍を破シト加藤清正ヵ朝鮮にて明の二十万騎を手勢八千にて踏破りし程のたけしき夜討ハ類少なる事なるべし是を夜討の手本ト云とも可なるべし

第五巻終

海國兵談第六

撰士（附一騎前）

人ハ不器を貴ども然レども人〻万藝に長せる事も成難し但し得手ある所一藝苑（ツボ）ハ有ものなれバ其得手ある所を撰て夫〻の職を授べし孝に五等あり武も亦五等ある心得にて撰べし是主将第一の工夫なれども無學にてハ其器を撰ぶの道合点なきもの也夫を合点せるにハ多く書を讀て和漢才智の人主人器

を撰フの跡を考見時ハ誰教ルこともなく人器を撰フの道合点せらるへし然ルは故に人君第一の勤ハ多ク書を讀て人君の武を知るにあるへし（人君の武ハ平士の武ト不同）扱撰法の大畧を左に記ス猶工夫を加へし

○博文強記にして才智逞ク経濟に達シ口才に能骨柄（ヨクコツカラ）宜き者ハ家老の職に任スへし

○武勇を第一トして兵道に達シ才智ある者をは番頭に用へし

○勇壮にしておとなしく且ツ物に動ぜさる者をは武頭に用へし

○士卒の中、和漢の書を讀て多ク事跡を知ある者を撰て一組ト成置へし

○頓智頓才にして弁舌よろしき者を撰て一組ト成置へし

○兵道を心得物見等に心きゝある者を撰て一組ト成置へし

○多力勇氣の者を撰て一組ト成置へし

○弓鉄炮弩弓等の上手を撰て一組ト成置へし

○早道早態（ワザ）の者を撰て一組ト成置へし

○天文筭勘等の上手を撰て一組ト成置へし

○水練水馬等の上手を撰て一組ト成置へし

右の外撰次弟幾品もあるへし都て此類の者をば平生重宝致置て軍事ある時ハ旗本ハ云に不及番頭江も分ケ預て肝要の用に備へし

○惣軍兵を撰ブの法ハ骨柄逞クして一藝に長し意氣壮なる者を上とし次ハ藝能なくとも骨柄逞ク意氣壮なるを中とし次ハ藝能なく骨柄も逞シカらねとも意氣勇壮なるハ下撰に充（アツ）へし藝能なく骨柄なく意氣ぬるめなる者ハ取に不足也若止事を不得して用イば火の番ヶ飯炊（タキ）の類なるへし

右惣兵を撰ブの大槩也

一騎前

○一騎前の趣意ハ敵に當て勇壮なるを専トス呉子曰以進死爲榮、退生爲辱矣ト又謙信の書に真精の鉾先ハ鳴動れ中にあやこし（章疾）ト云リ又同書に鹿神劍ト云事あり是ハ接戦の時ハ前懸りに成て冑をも敵の劍にまかせて飛込トなり如此なる時ハ軍神、敵れ劍を遮て我身に恙なしと云義にて真一文字に敵陣江飛込事を主トせるの教ハ是等を一騎武者接戦の大主意ト心得べし扱馬の乗形物見の礼儀、武者詞、隠ル字等の事ハ一騎前の奥の手にして末に進キ事なれバ大畧を知ても足べし、尤に其本なる要領の事二三を挙猶考べし

○六具ト云に品々あれども先一騎前の六具ハ胴、冑、籠手、臑當、太刀、草鞋ハ此外大将の六具、身堅の六具、備の六具、番所の六具等あり閑暇の時学び置べし

上に云ル如ク六具に品々有て悉ク六れ数を用ル事なれども是ハ亀藏六より出

て例の牽強（コヂツケ）なるべけれど嚴く六ツに限り
たる事の様に思フも柱（コトヂ）に膠の類なるべ
き名因て小子は一騎の六具に糒を加て
七具ト教ル之

○身廻りの堅メは下より初メ左を先右を後
トス脱（ヌグ）時は上を初メ右を先トせる之

○鎧の縅（オドシ）毛、甲冑の名所なと詳なるに如はな
けれども大畧を博識にせるも可之其故は是
等の事に泥ム時は要法を失せる事なれど之

然レなから敵の容躰を見覚て大将江言上の
為、或は射中（イアテ）、又は手を負せなと仕たる時の為
なれど右躰の事を一圓に心得さるは第一の
不覚之ト知へし

○組討の為に時々角力を取べし古代は角力
も武藝の一件にして武士の藝能を吟味せる
箇條の中にも相撲も入たる之尤諸國より相撲
人とて有力の人を進レ事諸史に見へたれども
當世は歌舞妓（カブキ）同様の物に成て相撲は武士

の藝にあらずと思ふは不覚なる事也都て組討は高く組は弱し卑く組を善と心得べし

○都て組討は早く右手（メテ）指（サシ）を拔て組ながら突爲し、忠度亦は鹿之助等が組様を手本となすべし

附異國人と組に數の心得あり先異國人に國々の差別有て人の大小、力の強弱各殊也都て琉球暹羅（シャム）等の南人は骨柄短少にして氣力も弱し唐山も浙江南京以南の人は琉球暹羅等の人に准ずる也亦山西（スイ）北京及ひ韃靼朝鮮等の北地の人は骨柄も壯大にして力も　日本人より強し只氣象の鈍（ニブ）き尤如此之歐羅巴人は只長（タケ）高き迄にして、さのみ力もなく氣象も鈍し扨　日本人と北地の異人等と角力をするを度々見るにしに四ツに組ては北人後へも不退脇へも不倒只前江をかゝして、なで落せども流伏に倒る、之又一ツの心得あり唐山人の武藝は

蹴ル事を第一ニ習フて胸ト膝トを蹴ル之又後驍を能せる之又拳法とて握拳をもつて眼を突之此三ツを心得居て蹴られば驍らまじく突レさる様ニ早ク身ニ寄附を第一トもべし是唐山人ト組の心得之

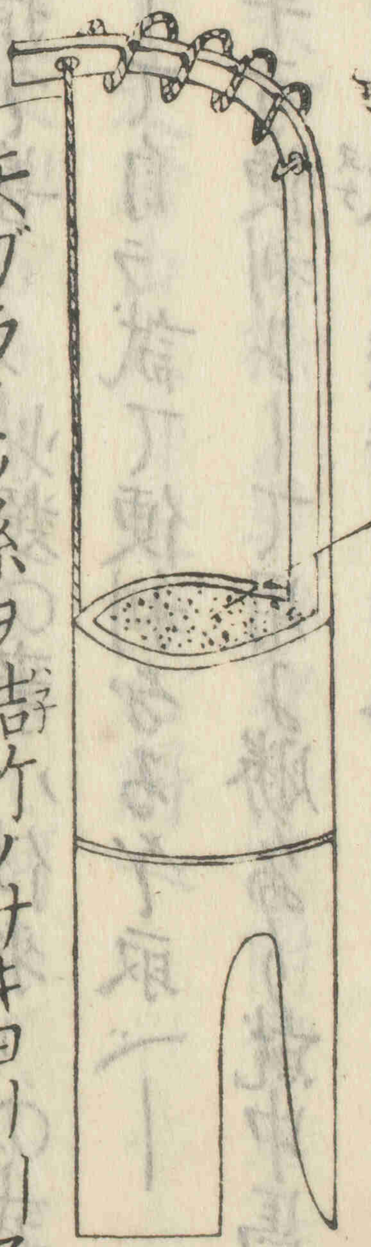
○武藝ハ定りなきものなれば何ニよても一藝を熟スべし多藝ニ如ハなれども多藝を心懸ル時ハ熟達仕難キ事ある之然ながら太刀ハ人ゝ不帯ト云事なし此故ニ太刀打をなす人稽古あるべし就中拔打の強キを貴フ之是太刀を学ブの要法之

○太刀帯ニて着たる太刀ハ拔難キもの之直ニ帯へ指を善トス此類の事ハ仕来リの式法ニ不泥して自ラ試て便利なるを取べし

○弓ハ半弓便利ニして用ニ勝れり就中馬上ニ利あり尤拔も強キもの之

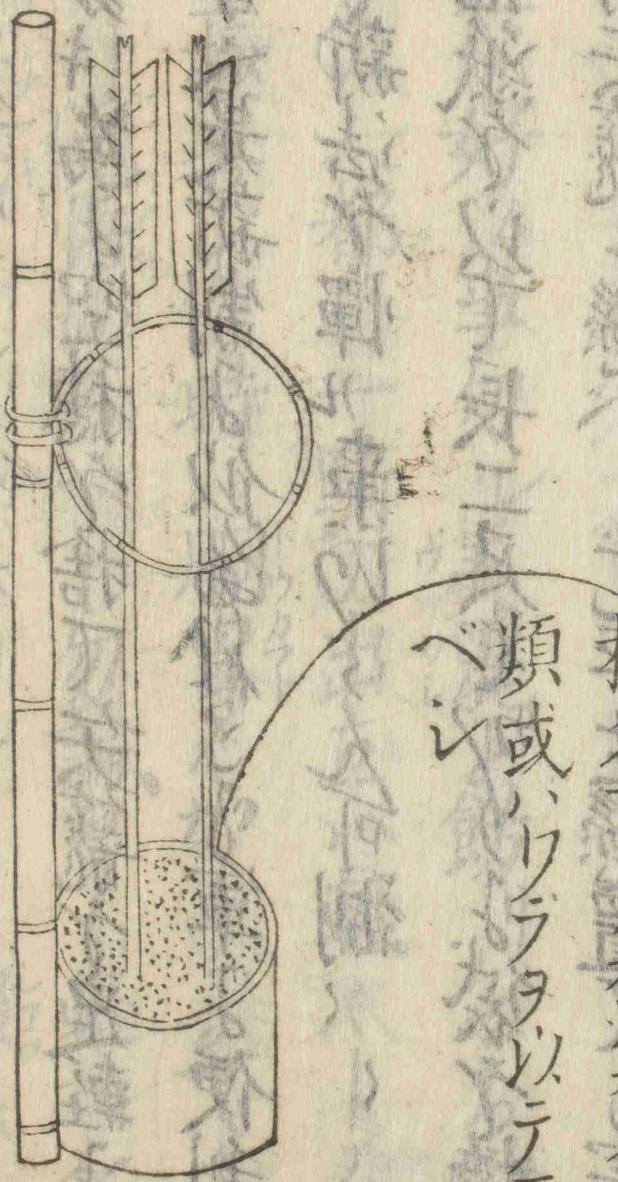
○矢籠ニ三等あり一ハ平生用ル所のものなり一ハ大竹を以て圖の如ク拵へし、二ハ小竹

よて作ル



コヽ紅藁ヲ入テ根タマリトス

矢ガラミノ糸ヲ桔竹ノサキヨリ引通シテ其余リヲ下ヘ引ツリ置ベシ矢ヲ抜ハ竹ハ子上リテ糸シマル故殘リノ矢抜落ズ



根タマリハ編箱竹筒ノ類或ハワラタバヲ以テ平クスベシ

細竹ヲ輪ニシテ木ニハ子チカヘシニスル故矢シマル

○當世の習ひにて足軽ハ皆空穗を用ル事なれども空穗を腰に付ル時ハ重クして働難シ殊に押行時などハ大に草臥ルものニ足軽に矢籠（ヤコ）を用て軍に不便利ト云事もなき事なれば働易き為に空穗を捨て矢籠を足軽に用ユべき事ニ是新制に似たれども軍に便利ならば何ぞ新法を憚ル事あらん可制く

○桐油紙を以て長二尺ばかりに袋を拵て雨天の時矢籠に懸べし尤平生懸置ても害なき事ニ

○重鎧を好ム事勿レ美麗（ウツクシ）に餝りたる鎧ハ必重きものニ都て一騎の出立ハ軽くしく出立べし至極畧せる時ハ胴冑（トウカブト）ばかりにても事すむものト覚悟あるべし勿論冑も軽きを用ユべし鎖鉢巻（クサリハチマキ）或ハ半首（ハツムリ）の類にして錣（シコロ）據の物ハ後ロを覆へば事足ルものニ大立物等を用ルハ褒（ホメ）たる事にもあらさる也

○太刀ハ古作を好ム事なかれ只丈夫なるを

貴ブヘ軍中ニてハ清平の世の如ク太刀、刀を玉の如ク玩物同様ニ大せつニ取あつかふものニあらず只敵を扣ひしく鉄棒なりと心得へし

○帯太刀ハ尺の伸たるハ好マざる事也大躰一尺八九寸二尺内外を善トス脇指も八九寸一尺を用へし都て太刀、刀ハ皆蛤刃ニ磨へし刃肉を落ス事なかれ

○力量ある者ハ太太刀を用ル事あり帯難キ程のしたゝか物ハ下人ニ持セ又ハ背ニ負事もあるへし此太刀ハ力量ニまかせて何程も大物を用へし

○鎗ハ徒鎗三寸穂ニして柄ハ丈夫ニ短キを善トス是又敵を扣例ス棒なりと心得へし當世流義ニこそ建て華麗ニ制作したる鎗ハ戦場ニ用ヒても只一打ニ打折べし武士たる者心あるを用べし

○都て兵器ニハ住國ト姓名を漆を以て書付

へし亦事急なる時ハ墨を以ても書しし又小刀
にて彫付ルも可之
○馬ハ只ハ腕爪（ウテツメ）の強きを貴ブ五姓十毛の説或
ハ相生相剋の吟味或ハ旋毛（ツムジゲ）、馬形等の事なと
ハ少しも拘わる事勿レ然レなから手に余ル悍（カン）
馬ハ乗さるものと心得べし
木火土金水の五行ト立て相生相剋を論
スルハ唐山（カラ）を本家にして其外ハ唐山に
弟子（テシ）分なる　日本、朝鮮、暹羅（シヤム）、琉球等の
國々而已ハ莫臥尓（モコル）、百尓西亜（ハルレヤ）、印弟亜（インテヤ）等の
諸國ハ地水火風を以て四行ト立（タテ）阿蘭陀
及ヒ歐羅巴諸國ハ水火氣土を以て四行
ト立なれとも此國々にて四元行の説有て五
行の生剋なし、然レとも何等にて論しても
のゝ害もなき事と思ハるれと我黨も表
立し議論にハ五行の説によるべし荒氣
なる武用ハ其説によらずとも志かるべ
きし

○氣弱き馬にて水を渡スにハ水際にて早駈四五偏乗て其氣の脱ざる間に渡スへし

○歩行にて急流を渡ルにハ三四十人手（テ）に手を取組て渡ルへし水、胄を浸（ひたし）ても流レさるものなり

○歩行にて一人渡ルにハ六七貫目の石を肩に荷て渡ルへし

○沼を渡ルにハ芳簀（ヨシス）、竹簀の類を段こりに打敷其上に物を置て踏渡ルへし尤渡ルに随て段

諸外国ニハ草鞋ナシ若外国江働カバ草鞋ヲ多ク貯フベシ○外国ニハ藁アレ𪜈草鞋ナシ手自ラツクルベシ、コノ故ニ草鞋馬沓ノツクリ様ヲシルヿ武人ノタシナミ也但シ蝦夷国ニハ藁モナシ心得アルベシ

くりに先江繰（クル）へし

○草鞋（ワランジ）、馬沓（マクツ）等の作り様ハ人々心得居へき事なり不知者ハ越度なるへし

○飯を炊にハ水一斗五升沸し立て米一斗打入ル時ハ飯になる赤鍋釜なき時ハ芝の上に打米を置水を灑（ソキ）懸て又上より芝くれを逆に懸て其上にて火を焚て飯になる又米を水にひたし菰（コモ）むしろの類に包ミ浅ク土中に埋て其上にて火を焚て飯になる又米を水にひたし

志桶に入レよき頃の石を焼て米中に打入レ
ば飯になる又洗米を布袋に入、青葉を以て厚
く包ミ焚（タキ）火の中江投（ナゲ）入テ蒸（ムセ）ば飯になる又潮（ウシホ）
にて飯を炊にハ釜の底に茶碗を伏置其上江
米を入て炊べし塩氣ハ茶碗の中江凝之
○水練の術心得居べし不知者ハ越度之
○野陣病陣ともに己が小屋に入時ハ四方を
目の及ブたけ見届置べし尤臥時ハ何の方を
枕（マクラ）になし何の方を跡（アト）に為トせきト心覚して

臥（フス）べし不意の事出來ル時狼狽（ウロタヘ）さるものへ且
亦病陣の時ハ病もしれさと病裏の方をも能く
見届置べし
○馬の芝（シバ）繫品々あり一ハ手綱にて前足を縛（シバリ）
置べし一ハ緐（オモカケ）のかうを髪中江引よせ置べし
○面頰（ホウ）あきゝ時、平生の如く冑（カブト）の緒を結ブ時ハ
頤（オトガイ）痛ムべし其時ハ下頤にて、よき程に真結に結
止て其余ハ常の如く結ブべし
○板障泥（アオリ）を二枚合に拵て水汲の具に用ル事

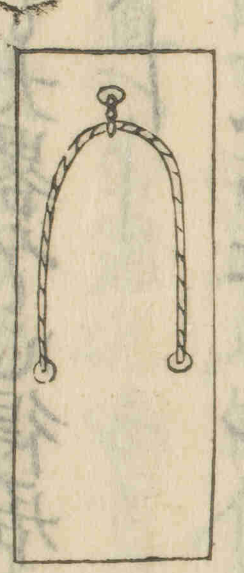
ひり

○鉄炮をてつそくに懸ルにハ筒先を下に為て左の肩より右の脇江筋違に懸べし、懸り口に肩の上より筒先を前江引廻して敵陣江一放（ハナレ）打懸て煙の下より切込時ハ一段手ぎこき懸り口なるべし、半弓をてつそくに懸ル事、直に弦にて懸べし但弦の方を前にもそべし

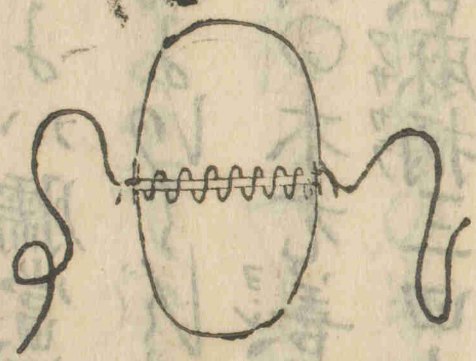
○戦場江ハ竹筒に水を入て腰閒に帯（オブ）べし

○草鞋ハ鷹野懸に着べし

○足入深キ地乃大雪なとを渡ルにハ樏（カンジキ）に乗べし其制二ツあり左に圖ス



是ハ板カンジキ之板ニ緒ヲ付テ木履ノ制ノ如クスル之



輪（ワ）カンジキ之ハ木枝ヲ以テ圖ノ如ク曲ニ真中ニ縄ヲ懸ルヿ圖ノ如シ是ヲ足ニ着ル之

○水を渡ルにハ臑當(スネアテ)佩立(ハイタテ)等を脱(ヌグ)事あり

○接戦の場にありてハ草鞋に中結をすべし

○松明(タイマツ)ハ楢(ナラ)の木尤善(ヨシ)又乾細竹(カレタルホソダケ)三四十本結束(タバネ)て用ルも善麻柄(アサカラ)(オカラ)三四十本を結束ルもよし

○物見も大畧を心得居べし別に物見傳あり考合スべし

戰場江出ル者の所持すべき品々

○胴服(トウフク)ト云て厚綿(アツワタ)の廣袖(ヒロソデ)羽織(ハオリ)裏表(ウラオモテ)ともに桐油布(ユヌノ)を用べし赤紙にても可之此品を鎧の上より打着(キ)しても寒をも防キ雨をも凌キ又夜具の代りにもなる之重宝の物とすべし然るから軍に臨て急にハ制作仕難し平日の心懸にて制し置べし

○雨具ハ蓑笠なるべし然しとも是ハ定法之戰場にてハ何等の物にても手に當り次弟引被(カブ)りて雨を防くべし但し雨を防ぐも押行時の事之接戦に至てハ大将士卒ともにはがぬれと知べし

○弦巻ハ指添の鞘江貫て帯江結付べし

○打替袋ニ糒五六合、乾味噌少入て常ニ腰間ニ帯、肝要の時ニ於ゐてハ食フ事なかれ

○二重廻りの手拭を腰ニ纏フへし

○細引一筋腰ニ帯べし

○紙類何レの處江なりとも少〻用意すべし

○燧袋此中江氣付、血止、艾、虫薬、并ニ馬薬、等用意ゐるへし此袋ハ刀脇指の栗形の處江結付ル之扨又甲冑して大ニ働ク時ハ鬱氣逆上して眩もの之此時ハ辰砂益元散甚善其方滑石六匁、甘草、辰砂、各一匁之右細末水服ス此外昔武士の様子を見ルニ疵を被ル時ハ或ハ鹽を揭込亦ハ直ニ灸志ゐる事ニ見ユ是亦戰場意氣の一療治なるへし

○軍中ニてハ時〻大蒜を食ヒ或ハ腰間ニ帯へし能寒、暑、癘氣を去之

○扇子も心次第用意すべし

○麻縄ニて長サ一尺二三寸の網を拵、跡先ニ

緒を付て腰間ニ帯ル飯入ニ用へし

○錢百文計緒ニ貫キ腰間ニ帯へし

右用具の大畧之猶所持仕たき品ハ鞍の四方手或ハ鐙下なとへ付へし

○都て士卒等の可ニ心得事ニたり万一味方の大将討死たりし時ハ早ク死骸を負て味方江引取て其首を敵ニ渡さぬ様ニすへし若事急ニして負て味方江引取難キ時ハ為（スル）ニ不忍事なれ共早ク其首を討て面の皮を剥（ハキ）亦ハ頭を未

置クヘシ定メ命令ス人ハ兼テ役人取[illegible]メ役十置ヘシ但シ[illegible]

塵ニ切碎なとして敵ニ得ラれて梟首（コクモン）せられざる様ニ心懸へし昔より大将討死志たる時ハ附従シ郎黨共悉ク討死せる而已ニして首を隠ス事を為ざる故首を敵ニ得ラれて梟首せらるゝ之義負討死の時も其首を深田の中ニ隠シれとも其隠シたる者亦立帰て義負の死骸の側ニ腹切シ故其足跡を糺シて終ニ首を得ラれて梟首せられたてたとい討死志たりとも梟首さへせられ孫を討死の上れ大

万一大将討死アラバ近習ノ者只十人死骸取納メニ懸リテ余ノ人数ハ大将ノ讐ヲ報ゼント愈ハゲミテ切込ベシ必ウロタヘテ敗軍スルコト勿レ此趣ヲ惣軍江能く示シ置ベシ但シ取納メ役十人ハ兼テ役定メ申合セ置ベシ

慶ト云もの也可思ニヽ又士卒郎黨等の心得あり義貞討死の時は軍の如ク無理なる働を爲ル時ハ強て馬を牽返シて無詮討死を免レしむる事士卒郎黨等たしなみの心得なるへし

第六終

海國兵談第七

人数組（付）人数扱

人数組ハ兵の肝要なるもの也人数組細密なる時ハ等（ヒトシク）進ミ等退て一伍の人数一身の如ク不相離して助合故ニ接戦するニ甚強ク且又組合正キ故心ヲ任て落行事もなし又敵ニ紛レ者の入べき様もなし都て人数組ハ軍の根本也　日本の軍立ハ此法なき故忽チ多勢忽チ小勢紛々トして不齊一也此故を以

て戰勝ても忽チ不慮の敗レを受たるためし多し新田足利京軍の時、足利家八十万にて和へたる所江義貞の軍勢二千余人敵勢江紛レ入て尊氏卿の前後左右に中黒の旗を指上て足利殿を追崩したる事なども編伍の法なき、故ハ又和田楠敵陣江夜討して引入たる時、立スグリ居スグリにて敵の紛レ者を見出して誘したり、立スグリ、居スグリハ和田楠だけなれども編伍正キ時ハ一人の紛レ者有ても組切の仲間同士にて明白に知る故、立スグリ、居スグリにも不及事ハ編伍の法左に記ス

⊗人數組ハ伍より始ル伍ハ五人組ハ其本法ハ屋敷並より組立ル事ハまづ城下住居にても相並レ五家を一伍と定メ相互に親戚の如く朝暮懇にせる故、遠方より姿を見ても誰ト知、暗夜に敵を聞ても某ト知、是五人組の大主意ハ扨又諸方の集り勢なりとも猶以て組合を嚴に定ムへし

○人數をて組上ルの次第ハ五人をて一伍トス中一人首立(トウドリ)ハ（但人數の多少ニ因て三四人を一伍トせる事もあり亦九人迠を一伍トせる事もあるハ小組頭百人頭の次第も是ニ準スへし尤惣士を悉ク騎馬ニせる事もあり亦首立ハかり騎馬ニして四人の卒をも歩ニせる事もあるへし皆大将の方寸ニある事ハ）五伍二十五人をて小組トス頭一人あり小組頭ト云、此小組をて四合て百人組トス頭一人ありて百人頭ト云此百人組をて十も廿も總(スベ)頭をて番頭とも侍大将とも云、此番頭侍大将をて總司ルハ大将ハ扨右の如ク人數をて組上置て接戦の時ハ一伍の卒ハ首立を離ル(ハナル)事なかれ小組二十五人の人數ハ小組頭を離事勿レ百人組の人數ハ百人頭を離事勿レ百人頭ハ番頭侍大将の旗馬印を見失ハず縦(タテ)横(ヨコ)進(スヽ)退(シリゾク)附纏(マトウ)へし扨各頭分の者ハ危を見捨(ステ)ぬる者ハ嚴科あり軍法ハ巻ニ出ッ、扨敵國を手ニ入レて段〻進ム時ハ敵國の人數をもて吾ヶ軍兵ニ用ル事あり其時ハ我ヶ人數を敵國の人數ト半づゝ組合すべし其法敵國の人數を百人づゝ分て百人

頭江渡スへし百人頭是を受取て其人數を四
に分て二十五人ほどゝ手下の小組頭江渡スへく
小組頭受取て己（ヲノレ）か手下の五伍を十伍に作ル
とも亦一伍五人を十人に直ス こともある時ハ
人數の組合セ手間疾（トク）相濟（スム）之何レにも人數組
ハ軍の大本なりと心得へし且又近來の風に
て惣軍士、面々に思々の指小旗（サシモノ）を用ル事之なる
る程惣指物ハ其行列見事にして壯觀を示ス
樣なれども其實ハ不好事之其故ハ一にハ大

風に難儀ゝレ二にハ雨に重クなり三にハ蘙薈（ケイ）
に働難ゝ、かやうなる障（サハリ）ある事なれバ指小旗
をバ不用して惣軍士ハ冑（カブト）印（シルシ）、笠（カサ）印、袖（ソデ）印等にて
惣相符を定ムへし但し倍臣（マタモノ）ハ惣印ハ直參と
同樣にして別に何所（トゴ）を倍臣の惣印を付へし
是又大將の心に任せて定ムへし扨又一伍の
首立ハ肩印を付へし印ハ各心に任スへし四
人の人數右の肩印を目當に首立を助ケ働ク
へし小組頭ハ惣印の外に何そ心に任て別印

を付へし二十五人の人數此別印を目當に小組頭を助ケ働クへし百人頭ハ鎧の毛色を以て印を定〆其上に本大將の隊の旗二本を立へし番頭侍大將ハ母衣（ホロ）を着（ツク）本大將の隊の旗五本を立列、其外に各の家紋を附たる小幟（ハタ）二本を馬印に用へし（番頭以上己レろ家紋を付たる幟を用ルとも幟の上の方に本國を記スへし本國を記スとハ仙臺ら仙字を書レ薩广ハ薩字を書スル心之）本大將ハ家々に傳へたる由緒（ユイショ）の旗をも用ヒ又隊の旗十本をも用ヒ又家紋を附たる旗十本をも用ルへし右の如く人數組を定〆置ば急に人數を分にも番頭一人に命ずる時ハ預（アツカリ）の百人組幾組なりとも其番頭に付纏フものなれバ三百人五百人を分ルとも番頭一人に命して事濟之亦百人二百人を分ルにハ百人頭一二人に命ずれバ事濟なり小組を分ルとも亦然り

◯右の如く人數を定〆置て敵ト接戰するに至てハ一伍の首立（トウトリ）ハ四人の真先を懸て敵に

當ルへし小組頭ハ二十五人の前を懸百人頭ハ百人れ前を懸へし番頭侍大将亦然り

○右の如ク番頭ハ百人頭小組頭等の前を懸ル定法なれとも足場悪キ處抔又ハ決シて勝難キ事を見切たる時ハ妄ニ野猪流の先懸をすろ事勿レ懸ルも引も時宜あるへし

○倍臣をハ其主人々引纏て召連へし勿論倍臣も主人ト相並て働クもの也但シ上ニも云如ク惣躰ハ直参ト同様ニして別ニ倍臣印（シルシ）あるへし

○家中四五十人以上所持したる者を兼て撰置て是を寄合組ト名付ケ五人も七人も寄合セて一備を立させ倍臣の働を為しむへし但シ人数組ハ上ニ云所の法ニ准スへし尤主人々の心次第騎馬ニ仕立ルことも道具ニすることも存慮ニ任（マカス）へし勿論寄合組を總司ル頭を一人添へし是を寄合頭ト云也

但、倍臣の功を大将江言上すろハ主人

自ら言上せる事勿レ、彼ヶ家中の功をもて是より言上し是ヶ家中れ功をもて彼より言上せへし○右の如ク人数組正キ時ハ人数を分合せるに手間不取亦敵の紛レ者の入へき様もなく亦人数の落散(オチチル)事も仕難レ都て軍の大本ハ人数組にある事なれど必忽(ユルカセ)にせる事勿レ扱人数組の事をて合点して、人数を扱(アツカ)ウ法を知へき事なり其法左に記ス

○人数を扱法トハまよし軍ハ大勢の人を自由自在に使フにあらされハ不叶事なり日本にてハ人数を使フに采弊乳或ハ懸轂にて使フのミなり采弊にてハ五六百の小人数使ハるべけれども其上の人数ハ使イ難シ況ヤ万以上の大軍に至てハ一本の采弊を如何様(カヨウ)に振舞スとも行届カさる事なれバ采弊を以て使フ事を善法とハ云難シ又懸轂にて言含(フクメ)ントなせる時ハ武者どよミ（鳴動）トなりて武者

ごよミトハ大勢數を立ル時ハ、どよめきて何トなく騒敷（サハカシク）、備も不行作（ケ）になるものなりされバくに武者ごよミをせバ太に忌事之、まして大人數を使フにハ旌旗金鼓（並ニ）音の替りたる鳴物、吹物を制作して兼ての操練（ナラシ）に此旌旗を見せ、か様に働をせよ、此鳴物を聞（キカ）せ何もうに働べきト云事を能呑込セ置て戰場にて其約束の違ハざる様に嚴重に敎込へし是人數を使フ要法なり大畧を志るしむへき、爲に其仕形に

一二を先に記ス先兵に将たる者面〻に工夫不簡にて如何様にも定ムへし只肝要ハ約速の違ハさるになり

○人數の懸引ハ金鼓及ヒ鳴物たるへし分合（並ニ）敵の有無を通スルにハ旌旗を用へし先旗本に五色の旗を用意仕置て、物見より東に敵ありト注進あらバ鐘を鳴し人數を止メて青色に東字を出したる旗を指上へし其時諸手鉄炮一[illegible]放さ、發して承知の旨を大将ニ知

スヘし赤白黒亦同法之（青ハ東、赤ハ南、白ハ西、黒ハ北）諸手此旗を見て敵ある方を知之扱懸レト云相圖に青旗を東に向ケて振ありし大鞁を鳴スヘし其時東組の人數計て懸ルあり四方皆同法あり

○青旗赤旗二本立ては東南に敵ありト知ヘし二方四方亦同法あり

右旌旗金鼓鳴物吹物等を以て人數を扱フ法の大畧之猶工夫を加て如何様にし定ムヘし何レにも人数を扱フ要領ハ法しト操練トにある事にして法亦操練より重き事ト知べし

第七巻終

海國兵談第八巻

一　押前　陣取　備立並病陣　野陣

押前ハ人數を引纏（マトウ）て押行道中也、右の押前、陣取備立の三ハ大なる差別にあらず押行人數を止レて備トなり、備を押廣（オシヒロム）て陣トなる、元來陣ト備ト二の物にあらず異國にて陣營同法ト云も此趣意也　日本にてハ陣取ト備立ト別傳なる故事多クして煩（ワツラハシ）キ也只陣營同法を宗とすへし扨又陣場の普請ハ遊軍の兼

役ニ定メ置て普請の時ハ人数を分て働カセ外ニ其地の百姓荒子等を用へし随分手軽（カロ）ク手間疾（マトキ）を善トス

○押行時ハ百里千里（六町一里之）の道なりとも物の具して押へし斯（カク）なれとも別ニ具足櫃（バコ）持（モチ）を召連（ツレル）ニ不及之但炎（エン）天の時ハ脱（ヌキ）て擔（ニナウ）事もあるへし

附具足櫃ハ渋紙（シブカミ）張抜（ハリヌキ）ニ制スへし投（ナゲ）ても損（ソン）傷せぬ又水汲の具ニも用ラるゝ之

○人数を押出スニハ能々四方の伏を捜て出スへし忽ニする事勿レ

○押前ハ二行、三行ニ押事なれとも街道（カイトウ）狭（セマ）キ時ハ一行ニも押へし但一備毎（コト）ニ中（ナカ）間を明（アク）へし

當時　日本の街道多クハ左右より田畑ニ切落シあるゆへ日光街道の外ハ東海道ニても十分の街道ニハ云難シ況や其余をや殊ニ西國九州の街道甚狭キ之大ニ本意を失ル事なるへし思之

○押行間に大小便又ハ草鞋（ワランジ）等を着替ル時ハ平士ハ首立に断（コトハ）リ、首立以上ハ身に近キ平士に申断て已レが行列をくずし、用を辨（ベン）じて本列江欠（カケ）付べし但シ三町迄欠後るゝものハ罪ス

○押行、路程（ミチノリ）ハ一日に四五六十里（大道七八九里ニ）なるべし是又（小道ナリ）然なりとも必勝の見詰ある時ハ百里も百五十里も押行之先蹤多し見合スべし

○喩ば七備ある人数なりとも前、左、右、旗本、小荷駄、遊軍、後備ト押之遊軍ハ前後二隊あるべきことなれども人数すくなきときハ前遊軍をもて旗本にて兼べしさてまた前、左、右、後ハ各持前をもつて定メ置べし、持前とハ左備ハ左の敵にあたり右備ハ右の敵にあたるの類なり此如ク定メ置ても急に敵に出逢たる時狼狽（ウロタヘ）ざるなり

○陣を取敷にハ旗本の陣所を目當に為て前備ハ前、左備ハ左ト取時ハ惑事なし

○小荷駄のことハ次の巻に小荷駄の條に述

○ルが如しいはきに一後(イチアト)に置事勿レ中軍に置べし

○細道難所などは能、伏を捜て後、早ク押通(トヲル)べし忘遅ゝせる事勿レ

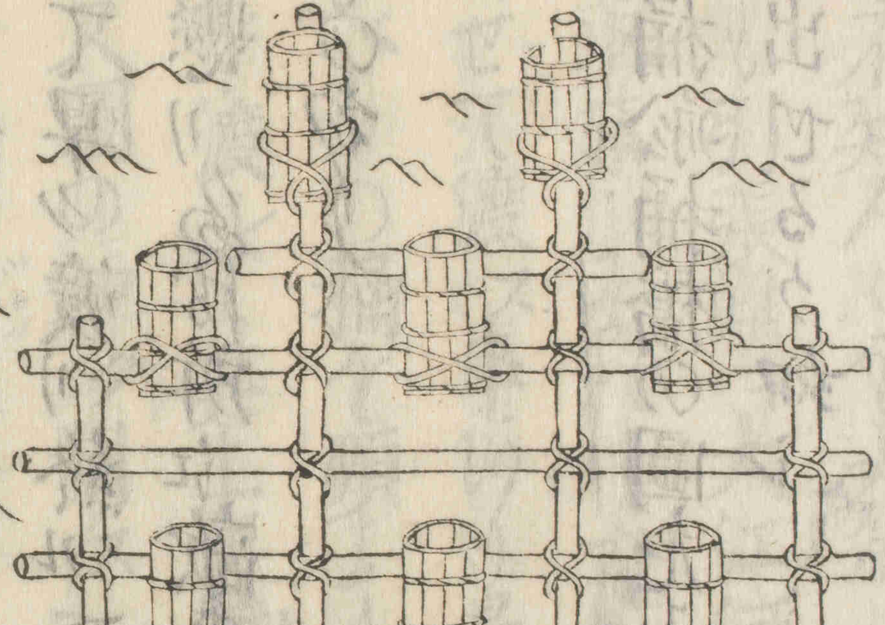
○大河江押懸りたる時橋無シても在家を毀(コボチ)又は竹木を切取て筏を組て渡スべし扨筏ヲ組ては水中にて上流より組始メ川下江組下ルべし○流緩キ水ハ直ニ橋に成様ニ組べし組様ハ先其水幅ヲ積ルべし積り様ハ町見家の平町法を用べし又大荒増の積り方ハ水際に樹木あらバ其樹木を目あてに為樹木なくんバ別に柱を立ル、これを見ならし向の岸にも目當をして岸に傍て川下江下リ行、向の岸の目當ト此方の目當の木ト同じ位ナル時踏止て此方の目當の木迄の町間を計レバ大槩川幅に似よるものなりト云リ其長サを以て筏を組べし又水練の達者四五六人に細キ綱を附て向の岸江渡し、渡し終りたる時、細綱(ホソツナ)の後

ゟ大綱を附て向江引渡させ端を能く結止て後、水を不知ル人〻を大綱江取附せて渡スへし○又綱も引張難き大江河ハ大小を不撰桶類（エラハオケルイ）を多く取集メそれ江大木、大板（イタ）等を結付て大勢取付せて渡ス事あり是を桶船ト云圖の如く制スへし○桶を順よく向の岸迄浮て其上ゟ大木を渡シて其上を渡ス事あり是を桶橋ト云是又圖の如く制スへし但シ急流なるを水上より桶を繫（ツナグ）事あり是又圖を見て知へし

○馬ハ筏、船、桶橋等江引付て泳スへし何レ心きゝて早く渡り終ルへし必遅〻する事なかレ渡り懸りなかば所江敵来レハ狼狽（ウロタエ）て大敗軍するものあり

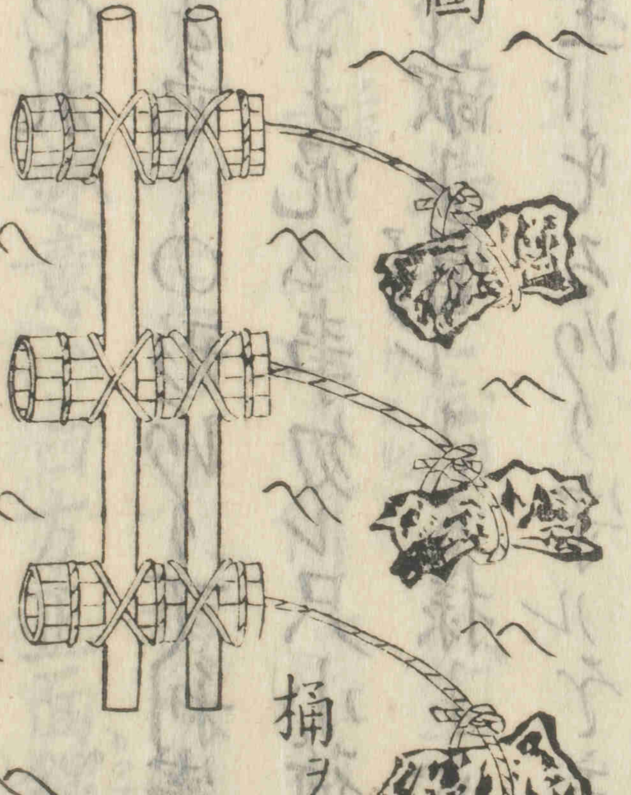
桶船桶橋の圖左に出せるが如し

桶船之圖（オケフネ）



桶の數も多キ程善トせる○渡ル時ハ棹（サホ）ヶ榜（カイ）を用ユ

桶橋之圖（オケハシ）


川上
桶ヲツナク図
川下

右押前の大畧之此下陣取の大法を記ス

○陣を取にハ陣間容（カンイル）陣（ナンヲ）ト云て備ト備トの間ハ一備丈（タケ）明ケ置もの也勿論隊（立入クミ）間容隊人間容人ト云事も右を推て知べし此如ク明（アキ）間（マ）なければ接戦するに行詰（ツマリ）て働キ難レト云リ必密（レゲク）に相並（ナラブ）事なかれ

○古より陣に色〻の形ありて利害得失を論すれとも妄りに泥ム事勿レ只小荷駄を中央に置てもさト敵に當（アテラレ）さる様に心懸べし

○陣に戦を主トするあり守ルを主トするあり時宜に因べし

○毎陣（ヂンコトニ）、奇正（キセイ）の心持を忘却（ワスレ）せぬ、互に仕手（シテ）脇（ワキ）ト成て働ク事を旨（ムネ）トすべし何レ江なりとも相手組（クミ）て接戦するを正トなし、横を入ルを奇トする也奇正の大趣意ハ四方正面、鐶（タマキ）の端（ハシ）なき、ク如キ心持也委キ事ハ戦法の巻に云ル所の如し

○人数多クとも一二三の先手、一二の左右備、前後の遊軍、左右の後備等心次第なるべし

○大人数の備なりとも一備毎に奇正を設も可之

○先宿陣にハ驛場に陣せる事ハ其法また宿(ヤド)ルへき驛の小口より二町許先江出張備を設て固むへし次に宿の両裏(ウラ)を見届、其上に四方江多ク物見を置へし扨惣軍の一後(アト)よりも一備立て固ルハ右の如ク固メ終りて後、次第を乱サずして一備ごとに宿入せへし惣軍宿入終て後、旗本よりの下知にて跡先(アトサキ)の固メ備も宿入すへし扨此出張備ハ遊軍の役之扨又出張(デハリ)備、宿入して後も四方の物見夜番(ヨバン)等ハ怠ル事勿レ別してかやうの時ハ大切の役なり慎へし若怠ル者ハ即坐(ソクザ)に誅(キル)ス

○宿より人数を押出スにも後(アト)を固て押出へし

○久キ宿陣なりとも前後左右に出張備を設ケ置へし尤物見夜番等怠ル事勿レ慎へし

○野陣ハ宿陣の作法ト少シ替レども次第行列を乱サさる心持ハ同様の事之但シ一夜の

陣なりとも惣構に柵虎落（サクモカリ）にするべし長陣ならば馬防の堀を堀其土にて土居を設べし

○陣門ハ其数人数の多寡に因べし但大将の用事ト云とも印（シルシ）なき者ハ出入を禁スべし勿論夜中の出入猶以て禁スル之或ハ人来て入度事を願ヒ又ハ敵方より内通（ツウ）心替（カハリ）の者等来て言上致度旨有なりと云とも入ル事勿レ門外に扣（ヒカヘ）居（オラ）しめ主将江伺ヒ下知を待べし

○病陣野陣ともに小組ハ一組ぎり同病すべし又倍卒する人数組なりとも一伍五人同病なるべし倍卒も数に不拘主人こゝに附纏フ之

○陣中の小路ゝハ幅七八間より狭クせる事勿レ勿論折目ゝに番所を置て誰何（トカメル）すべし尤印なき者ハ夜中通行を禁ス

○廁（カハヤ セツイン）ハ長陣ならば小屋の蔭（カケ）成又ハ平等（タイラ）の地なれば畢ク部（シトミ）をなして其陰（カケ）に浅ク長溝を堀（ホリ）置て大小便を便スべし亦一日二日の野陣にて溝廁（ミゾカハヤ）も造（ツク）ラざる時ハ人ゝ大便の度毎自ラ

小穴（アナ）を掘て大便をなし其上江土を覆（カヽイ）置へし是を嚴格（ケンカク）トせべし妄りニ糞（フン）（クソ）せる者ハ笞刑（ムチウツ）ニ處スへし

○陣中ニて樵（キコリ）、水汲（クミ）、野菜取等ハ相互（タガイ）ニ言合て出へし然とへども倍卒無ニ二十五人同病なりとも一伍より一人ずゝ五伍より五人出スへし一人ハ水汲、一人ハ野菜取三人ハ薪取なるへし倍卒ある人数組なりとも一伍五人の主人、倍卒一人ずゝを出スへし法ハ上ニ同、但自身出ルとも倍卒を出スとも番頭の印鑑を以て通行せへし右ハ通行判ハ在陣中一伍江一枚ずつ渡し置事之但し失フ者ハ笞ッへし且又樵、水汲等ハ半時を限ルへし遅（ヲソ）ク帰ル者ハ是亦笞ッへし

○小屋ハ九尺棟（ハリ）ニ作ルへし小屋割ハ一人前、二尺ニ四尺ト積ルなり太平の世ハ不箇ニてハ狭き様なれども陣中ニハ臥具とり物もなき事なれバ人多キ程二尺の割ニて事足ル

もの也五伍二十五人なりとも七間渡スへし此内ニて飯炊事もなるもの也馬ハ一疋三尺ト積て十疋五間の割なれハへし但レ定起レ之

○急の野陣ハ澁紙或ハ苫又ハ菰むしろの類を張て雨露を凌ク也其仕形竹木を以て冂此如ク鳥居形を立て右の品を打懸両端を左右江引分て土際ニて留置時ハ∧此如クニ成也此法を便利トス但レ澁紙ハ急々の制作ニ出來難キもの也太平の日漸々ニ制作して嗜ムへし今も古風を不失國士ハ年々澁紙を制せる者もあるなり善ト云へし

○野陣を取敷ニ習あり左ニ記ス猶工夫あるへし

○野陣を取敷ニハ山或ハ水ニ因へし就中水草の便りを見立ル事第一之儀なり

○小高キ岡の四方より寄場宜キ所ニハ陣スる事勿レ四面ニ敵を受ル憂あり

○敵流水ニ因て陣ルある時己レ其下流ニ陣

せる事勿レ為ことし陣せるとも其水を飲さるものハ敵の穢汁を受ルのミならず毒流レの氣遣ありと云り

○葦萱(アシカヤ)多キ傍(カタハラ)ニ陣スル事勿レ敵より焼立らるゝ気遣あるトハ

○河原ニ陣スル事勿レ洪水の気遣あり

○谷中ハ云ニ不及、谷の入口ニも陣スル事なかれ塞キ討、推(オシ)水の気遣あり

○卑湿の地ニ陣スル事勿レ軍士湿気を受て或ハ腫或ハ脚気等の病を生スルハ

○墳墓の地或ハ忌く敷地名の所ニ陣スル事なかれ悪気ニ感シ又ハ悪名ニ感スル事あり

○地形ニ因て風の當ル所あるものハ能見計て此如キ所ニ陣スル事勿レ

○都て陣所を立拂ニハ炊(カシキ)道具臥(フス)具等ハ面々の名符を附て小屋ニ捨置て自ラ世話せる事勿レ小荷駄懸りの者見廻て皆取仕舞ハ是を定式トス

右陣取撰地等の大畧ハ先是等の事を能呑込時ハ立廻レル陣取ニ事欠事なし此上ハ和漢の軍書ニ陣法の傳授數多あり學て極所ニ至ルへし

第八終

海國兵談第九卷

器械並小荷駄附粮米

それ兵器繁多ニして殊ニ種ゝの制度寸尺秘密傳授等の習ひある事なれとも強て泥む事ニも及ハさる歟初ニも云如ク物本末ありそれ兵器の本末を云ハ太刀ハ丈夫ニして切レ善(ヨク)、鎗(ヤリ)ハ太クして通リ善、甲冑ハ札(サネ)善して輕ク馬ハ鞍爪丈夫ニして物ニ不驚(オトロカ)是本ゝ柄鞘(ツカサヤ)の制(セイ)度(ト)抓入(カキイレ)、柄(エ)の削(ケツリ)様石突(ツキ)の仕附、縅(オトシケ)毛小道具の習

相形旋毛等の掟ハ末也萬事皆本を能會得シテ末を大畧ニ為へし扨又古有て今無兵器あり弩、角等也又古兵器ニ用て今兵器ニ不用ものあり熊手、大鐵、大棒の類也是等ハ皆利用多キ兵器なれ共志ある将帥時ニ取て用ヒて利あるへき事也尤ニ兵器の大數を記ス猶工夫の上、制作あるへし

○刀ハ丈夫なるを用へし作ニ拘ル事勿レ但シ二所目釘か或ハ堅木柄なるへし精キ事ハ一騎前ニ記ス

○持太刀或ハ野太刀とも云亦一騎前ニあり

附片刃を刀ト云両刃を剣ト云也刀剣の類、其制國々の差別あり唐山ハ剣也其制鎬厚クして長サハ一尺二三寸より六七寸迄也二尺ニ及ブもの少也阿蘭陀及ビ歐羅巴諸州も剣也其制鎬薄ク隠れしなひて長サハ大槩二尺余也只刺事を主トして切事を致さず其切先二寸許、毒

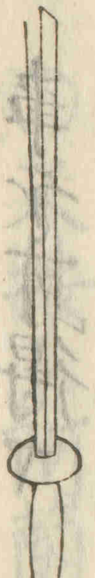
薬を塗置之浡泥(ボルネオ)國ハ刀之其制作
日本刀の形にして只薄レ鋸(ノコギリ)の如ク志か
う之是等の諸國皆右の手に刀剣を持、左
の手に楯を持て片(カタ)手討の戦法なる故其、
刀剣及ビ楯の軽キを貴ブ之

○又按に阿蘭陀の書に五世界諸國の人
物を圖画して其(ソレ)の國人驍勇ト称せる風
俗ハ皆刀剣ト小楯トを身を不離(ハナサ)、持ル姿
あり是吾　國、両刀を帯ル掟ト同ク勇
氣の致ス風儀なるへきなれども其楯を
頼ミトせる心根甚弱シ　日本風の、首
をも敵に渡シて切込ムの勇に何ぞ當ル
事を可得ヤ

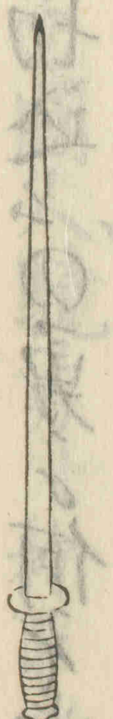
○又按に剣に毒を塗、鏃に毒を塗事ハ皆
其てざ拙クして一討に切殺シ、一箭に射
貫(ヌク)事を致レ得ざる故、小疵にても毒の為
に眩(メクルメ)ク様に計りあるもの之　日本の
如ク一刀に胴切、一箭に射貫(ヌク)時ハ何ぞ毒

を頼ム事を為ス然ルに俗人の癖トして毒矢ト聞て甚恐レて拙きが故に毒を用ルト云ことを却て不知ハ愚ト可謂銘扱小子親リ見ル所の三刀剣左に出ス

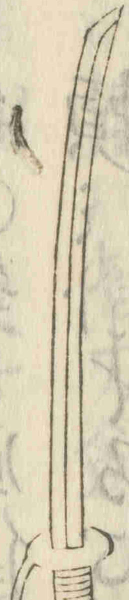
唐山（カラ）剣



阿蘭陀剣



浡泥（ホルネヲ）刀



鐔ヨリ柄頭江延ツヾケニシテ拳ヨケノ鉤アリ

楯ハ只面を防ク物にして其制作甚軽薄也其形ハ丸も長も四角も有心に任ル也

○弓ハ半弓を善とし尤拔もよきものなり角弓尤妙也但シ制法を精密にせざれバ弾（ハヂ）キ弱シ其制法ハ武備志に委クあり又弓家にも少（マレ）ニ知人あり尋問て制シ置へし又急なる時ハあナ下工ソドハ樫等の丸木弓を用へし

○平生の稽古に具足して塗弓（ヌリキ）根矢（ネヤ）を射ル事を修練すへし當世の射術ハ奉射（レヤ）の弓法なれ

も白弓（キ）に軽矢を用て片肌脱（カタハダヌキ）にて射故大に射易き事なれども是ハ太平の礼射にして武藝の奥の手なれども、まづ其口本（クチモト）なる武用軍中の射術を射覚て後、奥の手の礼射を習フを順道トせしなり片肌ぬきの射法のミ射習ッて遽（ニハカ）に具足して射ル時ハ平生の上手も下手に成もの也是習ハざるが故也人々可思

附仙臺の國中にカマボコ弓ト云もの多し亦十万打とも云相傳フ秀衡武備の為に制作せる所也ト云（カマボコハ其形状に因て名ツクル）（十万打ハ地名也高舘ノ下ニ十万坂ト云所アリ此地ニ弓工ヲ置テ十万挺ヲ制タル故十万弓ト云ト云リ）其制白弓（キ）にして外（ト）竹のミ、打合て内竹なし、然レども雨露ハ云に不及水中に入ても離レ損ずる事なし甚重宝ト為へし只其材（ユミ）乏しき故當世廢レなり併ラ再興あり度弓也○小子按ずるに其膠（ニベ）ハ尋常の膠にあらずして漆打の様に思ハるゝ也又按に竹木打合るゝに漆木（ウルシノキ）の下に於

て漆を抓取（カキ）なりし茶を合て物を接（ツク）時ハ、粘着（チハリ）甚強し若クハ此類にもちゆるべき紀可試（茶ハ即麪粉之）

○矢の制作ハ、矢人にのミ任せ置事勿レ凡戦場江出ル程の者ハ義キ制作ハ不成とも箆を矯羽を附ル事ハ人々仕覚可居事、是又平生の軍政にいるへし

附急に矢を制せるにハ何等の竹なりとも矯（タメ）て筈（ハツ）より六七寸下たに穴を穿テ其穴江廣サ一寸長サ八寸計の紙を引通し筈の方江引返して射ル時ハ羽のる如ク飛なり

○弩甚強クして其上に中りも細かなるなれなり然レとも今ハ絶果ぬり願クハ再興して鉄炮の代りに用度事之火薬を惜ム良材なるへし古代ハ筑紫長門奥州なとれ邊要に弩師と云て弩組（イシユミクミ）の武士を置レぬる事諸史に見ユ考合スへし

○矢籠の制是又一騎前ニあり
○阿蘭陀流ニ大矢を弾ク柱弓（ハレラ）あり詳ニ初巻ニ出ス是又制スへし
○大筒ニ品々あり是又初巻ニ詳之
○木筒煉王等あり是又初巻ニ出ス
○棒火矢あり是又初巻ニ詳之
○鎗ハ長短不同を用ル事なれとも尋常の人ハ短キを善トス多力人ハ長キを用て徳多シ但シ徒鎗（スヤリ）三寸穂なるへし

○大太刀トテ三尺内外の刀ニ三四尺の柄を仕付て力士ニ持セ働（ハタラカ）スへし
○大棒ハ跡先を鉄ニて張へし是又有力人れ得道具なるへし
○大鳶嘴是又有力人れ得道具之
○長柄の鎌、別シて船軍ニ利多シ
○鞦の事是ハ馬の條下に出ス
○障泥の事是ハ一騎前ニ出ス
○楯ニ種々の制あり、厚板を以て制せるあり、

又薄板にて厚サ二寸許の平キ箱を拵其中に綿乱打藁（ハラ）等を込ルなり、又鬼籐（ニルトウ）を八九筋究簀（スノコ）の如ク編（アミ）テ二枚合て作ルなり、又藤蔓（ツル）を右の如クに制スルなり、又一寸五六分の角木にて籰（ワツ）を拵両面に生牛皮を張其中間（アイダ）江綿入の蒲團の如キものを下ケ置之是楯の極品之又仕寄（レ）楯、持楯大小品々なり大楯ハ高サ五尺余廣サ六尺程にして足に車を仕附、大勢にて持寄なり小楯ハ高サ三尺斗幅一尺余に作リ裏に持ツ所を仕付て人毎に自ラ持て詰寄しなり一本足を仕付て地江突立ル様に拵ルもなり各用ル場所なり能考て用へし又唐阿蘭陀の法に藤牌ト云もあり戦法の巻に出ス又足軽に持スルに一枚楯に穴を穿チ鉄炮を貫て持様に拵ルもなり正成ハ懸金を打ある楯をも用ヒ又長楯に横木を打て階子の代リになる楯を用ゐる事もあるなり都て楯の制ハ軽クして矢石の抜さる様に制スル事極意なり

と知へし

○鳴物ハ貝、大鼓、鐘（カネ）、等ニ不限音の代りなる品ハ何ニても用へし吹物ニも貝、角（カク）、大音喇叭（ラツパ）、長嗩喇叭等の別あり工夫して制作するへし

右の外守攻の具品ハいつれとも各條下ニ記して此ニ不レ載都て兵器及ヒ守攻の具ハ工夫了簡を以て新規ニ制作するへき事大将の方寸ニあるへし然ト云とも無学ニてハ才覚了簡も出難叓なれハせめてハ和漢の通俗軍談物ニても能讀へし助トなす之

小荷駄付粮米

○小荷駄ハ唐山（カラ）ニて輜重（シテウ）ト云、三等あり車ニ載ルあり、牛馬ニ附ルあり、人の擔フあり都て小荷駄ハ軍の根本なることなれハ唐山（カラ）の法ハ輜重をハ軍の中央ニ置て片端（ハシ）ニハ置さる事之

○日本風ニて小荷駄をハ一跡ニ置事、本意を

失る事なれば一べし其だけハ不意ニ敵ニ當らるる時ハ小荷駄を被ニ切取ニへし不簡するへき事なり

○小荷駄ハ粮米並ニ炊（カシキ）道具其外陣用之陣用ハなるたけ省（ハブイ）て冬ならば寒氣防キの桐油木綿の胴服一ツを用べし何レ其場ニ臨てハ寒氣強クとも菰（コモ）むしろ藁（ワラ）等の類を引被（カブリ）て事足（タル）ものなり尤長陣ニハ風雲霞の如ク生スルものニト云り是等の事も覚悟するへし

○小荷駄ハ平場を押ニハ車ニ如ハなし其次ハ牛馬を用ユ急ニ難所を押行ニハ歩荷（カチニ）便利なり尤貫目の積（ツモリ）も預（アラカジメ）定メ置へし歩荷ハ米ならハ一斗内外雑具ならバ六貫目を限ルへし馬ハ強キニハ米六斗弱キニハ四斗位雑具ならバ二十貫目ニ限へし牛も馬ニ准せるなり車ハ強馬の四駄振を載て牛ならバ一匹、人ならハ四人して推へし扨一人ハ食ハ一日ニ一舛ト積て一斗の米ハ十人一月の食なり余ハ是

を推て知へし

○粮米ハ兵粮奉行の手懸りにて諸手江割渡スなり其法下に記ス

○陣用の荷物ハ一組切に寄合て印（シルシ）を附へしゐこへハ倍卒無（ナシ）の人数組なれハ五伍二十五人寄合て一箇（コオリ）に拵置、番頭百人頭、小組頭の姓名を書記シ並に一組の印を付置へし又倍卒ある人数組なれハ一伍五人寄合に箇（コオリ）置、三頭の姓名並に一組の印を付置へし

○押前にも陣所にも小荷駄を守ル兵士を別に定メ置へし此人数の多寡ハ時宜に因へし

○自國を遠ク離る程諸事不自由に成ものなれハ愈小荷駄を大切にして切取レさる様に計ルへし是迄小荷駄扱の大略なり此下、粮の事を述

○孫子に因粮於敵ト云て敵國江攻入てハ其敵國の穀物を取收て我か軍兵の粮米にしてたることなりといへ然ト云とも妄りに乱妨して

民間の物を掠取にハあらず國主の穀帛等を貯置たる所を取事也然レハかゝる仕組事の様に敵の倉廩も首尾好取ラレざるものなれバ粮食不足の時ハ民間の穀を借ル事也時宜に因て乱妨にてハ無之穀類ばかりを只取事もあるべし其時ハ目附役人等を附添て決して他物を取事を禁スべし若（モシ）令に違フ者ハ其場にて切捨にもすべし尤将師の下知無之に只取をせる者ハ乱妨の罪に准スべし

○敵國江攻入て厳ク可禁ものハ軍士の乱妨なり扨乱妨を厳ク禁スル趣意ハ戦勝て敵國を手に入てこれぞ彼ノ乱妨したる處も我ガ物なれども初發の乱妨に國人怨（ウラミ）を含て信服せざるものなり此故に乱妨を禁スル也扨穀類を借ル時ハ番頭百人頭等れ券書（テカタ）あるべし若亦敵國手に不入時ハ正直に返スにも不及事もあるべきなれども又再敵國江踏入為ニたとひ不踏入ども信を敵國に失フ事を患ル

者ハ返スものもあるべし今一定ニ云難シ又清野の術ト云事ありて城下の穀帛も民間の穀帛をも悉ク城内江取納メて一粒も敵ニ渡サざる仕形を為ル事あり、かゝる時ハ愈自國よりも粮米を續（ツヾ）ケされねバ手に入懸リ難けれバ國を取たるも事もあるべし此故ニ粟（モミ）を貯ル事ハ國主、知行持等の第一の心懸ト知べし王制ニも無三年之畜國非其國ト云リ可思

○總て陣中ニて飯を炊ニハ釜ハ不便利なり銅鍋を善トス鍋ハ弦あれば故ニ何等の物江も懸られ又物ニ觸ても鉄の如ク破レ損せざる故銅鍋を用ル之

○粮米ハ一人ニ一月一斗なるべし味噌五勺、塩一撮（サイ）ト積ルべし（味噌を用ルハ上の軍役之多クハ飯ト塩ト而已之）

○粮米を總軍江渡ス法ハまちも兵糧奉行の所ニ虎落（モカリ）を結て、口二ケ所付、一ハ入口、一ハ出口ニ定ムべし尤入口、出口ト大札を立べし扱上ニ云如ク倍卒無れハ人數あらバ五伍二十五人

一同に受取へし倍卒ある人數組なれハ一伍五人倍卒の數を計て一同に受取へし長陣ならハ三五日分も一同に渡ス事もあるへし扨受取時ハ番頭誰組某幾人分ト札を書て持來リ米穀ト引替にもへし

○大軍の時ハ兵糧所一ヶ所にてハ不足もあれ也人数れ多少を考て三ヶ所も五ヶ所も十ヶ所も有へき也但一ヶ所にて三千人に渡ス積あるへし（但シ旗本の兵糧場、何備の兵糧場ト云トを定へし尤なけれハ二重取有）

○米を渡スにハ虎落の中に渋紙或ハ席なとを敷置て穀を散し箕斟帳付両人にて斛取六人有へし但一斗斛を用

○薪水ハ自分にて支度するなり其法陣取れ巻に記スか如し

○鍋ハ鍋をかり別荷物に筒り車馬に付て鍋を染める小旗を指へし着陣以後陣中の小路くしを持廻りて渡ス、是も倍卒なき人数組なれハ五伍二十五人江二ツ渡し倍卒ある人

数組分ちて一伍五人江二ツ渡スへし

○押行時ト接戦の時ハ人々腰兵粮なるへし内場（ウチバ）よりしても五合飯を帯へし

○陣所ニ打着て飯を炊ント欲スル時急ニ軍始りて軍士皆打て出ル時ハ一組ニて五人ほとつ居残り急ニ飯を炊て戦場江送ルへし尤大将よりも心を附て兵粮の世話を致スへし

○陣中ニては平月も一日分の飯を一同ニ炊置を便利トス冬ハ二日分も炊置ルへし飯冷時ハ沸湯（ニヘユ）の中江打入て食へし温食ト成焼味噌（ヤキミソ）乾味噌（ホシミソ）等を多ク食へし別ニ味噌汁を煮ニ不及之兎角衣食住の艱難（カンナン）ハ太平の日ニも樂ミおかし折々試て心得居ルへし

○陣中の飯煙（メシケフリ）ハ多少不同ニ立ルを法トすへし上杉武田川中嶋對陣の時武田家夜ニまきれて人数を廻スへき支度（シタク）ニ其日の夕方一同ニ飯を炊たり上杉家其煙の常より多きをミて武田か人数を廻ス支度なる事を察シて遮（サヘキリ）

て此方より人數を廻して武田を大に迷惑(メイワク)させしめり兵を荷フ者心を配ルべし

粮穀盡ぬれば時糧に用ル品々

○塩を加て能煮熟(ニレユク)すれど草木の葉、十種に九種ハ食ハるゝものあり

○諸木の内皮及ヒ根、是又塩を加て煮熟すれど食ハるゝもの多し

○平日食覚ぬれば野菜類ハ云に不及百草の根及葉莖(クキ)ともに上の如にして可食

○鳥獸魚貝(トリケダモノウヲカイ)の肉能煮流して可食

○炒て食へど糠(ヌカ)藁の類皆飢(ウヱ)を救(スクウ)、尤麥稗(ムギヒヱ)なとの莖(クキ)も炒て細末して湯に攪(カキ)立て呑べし

○能煮熟(ニレユク)する時ハ革(カハ)道具食ハるゝと云り

○清正の家士ハ蔚(ウル)山籠城の時糧盡て為方(センカタ)なく壁土を水に攪立て呑ぬれば事なり其艱難押計ルべし是半息(カタイキ)猶存スル時ハ敵に降ルましき義氣の一念之

○至極の飢に及時ハ人肉を食フ事なるべし

是不仁の甚き言語に絶たる所なれども時勢に因て道レ去べき手段もなく又是非に降参せば事も成難ク又自害討死も犬死に準ぜば趣意ある時ハ人肉を食てなりとも一日も生延ル計をせる事、軍を致ス上にハ覚悟あるべき事ト思設べし

○右の外、海に混布（コンブ）、鹿角菜（ヒチキ）、荒布（アラメ）、和布（ワカメ）、海藻等あり、山に石麪、観音粉等あり是皆食て飢を救ふものゝ捜り求べし

○飢人に食を与（アタフ）ルにハ先赤土を水に攪（カキ）立て半椀（ワン）程飲セて後、食を与ふべし又朴（ホウノキ）の皮を煎じて一椀飲セて後、食を与ふべし此二法を不用して直（チキ）に食を与レバ忽チ死スルものありと云り

第九終

海國兵談第十巻

地形并城制

地形ハ戦ノ佐（タスケ）ナレバ詳ニセずんバあるべからず所謂（アキラカ）ニ険易順逆遠近等ヲ知ハ良将ノ能ス扨地形ハ戦ノ佐ト云ハ己レ小勢なりとも能険ニ因テ戦ヘバ大敵モ犯シ襲フ事あたハざるなり亦己レ高キニ居テ敵ヲ卑ニ受レバ高ヨリ卑江ハ働キ易キ徳アリ又太刀鎗等モ高ヨリ卑江ハ施シ易クして敵の胸以上江當ル故自然

ト利多シ此外左下リハ兵器の順を得ル故順トせる也己レ是ニ據（ヨル）ヘト

○向上トは上リハ逆也己レ是ニ據事勿レ

○八達の地ト云ハり澈〻ト開ケて四方の通路ある數地を云如此所ニ陣せるニハ其中ニて小高キ所を見立て陣スヘし但シ高キ所二ヶ所ありて一ハ後ロニ山或水或藪なとあり一ハ是等の物無シて己レ山水藪を帶ぬる岡を取へし

○險トハ山坂羊腸、高嶺、大水、深泥等を云なり味方早ク是等の地ニ因へし

○敵出ても不利（スリアラ）、味方出ても不利（リアラ）所ハ進退兩難の地也敵より味方を偽引（オビク）こしも出ル事勿レ如此時ハ味方陣拂して引去へし敵勢追來ラば敵勢の彼ノ地江出ぬる所を大返或伏を設て討取へし

右地形の大畧也猶細ニ工夫を付へし

城制付居館

○天之時不如地之利ニト云て時日、支干、旺相、風雨なとの天の時に於てハ勝へき理のある時を考て軍を仕懸ても地の固（カタ）宜きにハ勝事不成トハ然れハ城を築くにハ地形を撰ブ事第一なり地形勝れて宜キハ天造の普請なれハ別段に人作の普請を不加こも堅固なるものハ是地の險を人數の代りに用ル事にて地形を撰フれ大主意ハ地形の事能く會得あるへし

○易に地險ハ山川丘陵ハ王公設險以守其國ト云り然れハ地形ハ國家の寶なる事知へし此故に魏の武侯も美哉山河之固是魏國之宝ハト云り

○城を築クにハ山カ水に因へし山水二ツなかカノ〻備ルハ妙とし

○城郭トハ内曲輪（クルハ）を城ト云外川（トカハ）を郭ト云孟子に三里之城、七里之郭ト云も内曲輪ト外川トの事ハ城ハ以て君を守ル所、郭ハ以て民を守ル所ハ民トハ諸家中及ビ百姓町人迄を統

て云詞也

○城制ハ、　日本、異國其制殊（コト）ある故籠城の仕形も殊也、ましで異國の制ハ、上よりも云如ク郭を丈夫に構て民を守ル所トして郭外に人家無（ナシ）然ル故に籠城に及ても城下の地下人商賈等流浪して逃隠る事なく上下共に郭を守レて　日本流ハ外川ト云ものなし　ゑこひ郭なりト云ことも民を守ル所以（ユエン）なる事を重ゼさる故城下の町屋を夥ク廣大にする故、郭外に人家多クして籠城の時ハ、城下の下人商賈の類を棄物にするゆへ、逃亡の者夥ク出来して迯（ニケ）迷（マヨフ）、其上、天を怨ミ君を怨て嘲（ナロ）泣の聲、街（チマタ）に滿（ミツ）、是外川なき故也ト知へし扨又異國ハ大半民兵なる故、城下に六府の武士、交代に詰居ル故官人の外に常住の侍屋敷不多、常住の侍不多故自ラ商賈も不多、此故に城下を約カに取ちめて郭外に人家無様に爲（ナサ）るゑ也、　日本ハ、郭構（カマエ）麁相なる上に武士を不

殘城下ニ住居致サせる故商賈も次第ニ夥ク成て町屋を造廣ムレハ故城下段〻廣ク成て城ハ城、城下ハ城下ト別物ニ成なり此故ニ籠城ト成（ナレ）ども逃亡人夥ク出來して月も當られぬ騷動を生セし事諸軍記ニ記ス所の如し二百年前、萬端（ハンタン）事不足なる時節さへ騷動を生ス況ヤ今の城下をや願クハ段〻說ル如ク衣食住ト音信贈答類の無益なる奢侈（オコリ）を禁して質朴を敎其余計の料を以て積年漸〻ニ日本咽（ノド）喉（クビ）の城〻ばかりも總外川を建立仕度事之都て此條ハ大事の工夫なるところ之能〻不箇を用て制作なるへし

○國主の居城ハ國の根本人民の仰て畏服なせる所なれども地形ハ勿論、普請も城門及ヒ外ニマて見望ム所ハ廣大（オヽキ）美麗（リツハ）ニ造營して壯觀を示スへし是武德を輝（カヽヤカし）て太平を致ス術ニ

○支城並ニ居館等ハさのミ壯觀を示スニ不及事之只險ニ因て暴を防クを主トせへし

○古より四神相應（ソウオウ）の地を居城の勝地トス四神とハ青龍（セイリウ）朱雀（シユシヤク）白虎（ヒヤツコ）玄武（ケンフ）之青龍ハ水之朱雀ハ田野開ケて廣平なる地を云白虎ハ大道之玄武ハ山之前朱雀左青龍右白虎後玄武と云て天神地祇の輔ある地ト云リ思フに山を後廣平れ地を前大水を左運送の大道を右にしある所ハ第一の地理にあへしや因て天神地祇の輔無（ナキ）も猶有（アル）か如し

○平城ハ四方より敵を受て不宜之尤普請も

繩張（ナワバリ）を巧に為（セ）されて損多し但し天下を帥ル大城ハ廣平にして輻輳宜く四方の參勤運漕等の道路等（ヒトシ）キ場所を貴フ之諸侯以下ハ山か水かに因て片面に築くを便利トス

○山城も殊れ外高山に築く事勿し人馬の懸引等不自由なるもの之

○城の繩張に種くれ習傳授等ありト云とも大趣意を此城高く此池深ト云本文を宗トして都ての城制ある之へし

○城制は本丸二の丸三の丸外川ありて入子鉢の如ク構ル事にもあらず兎角地形に随イて三角にも入子にも長クも宜に應レて築へし廣平の地に城を取にはまづ少も高キ所を本丸トしてそれより二三の丸外川等を構ルあり

○都て居城ハ國の大小に随て遠近に不拘險を設クへし險を設ニは或ハ關を置（スヱ）、或ハ切通、或ハ大坂、或ハ船渡等を造て事あるを此難所にて一支、支フべき様に致置事あり又相應に関を設へし関ニハ大切の場所に大身にして武功の者を土着（トヂヤク）させて事ある時ハ本城江押来ル敵を喰止（クイトメ）させ又ハ後詰（ウシロヅキ）等をも為レムへき為之廣ク云時ハ諸侯の國々ハ江戸の関之箱根、碓氷、房川、浦川、等ハ江戸の險之亦吾藩を以て云時ハ笹谷（ササヤ）、柵並、尿前（シトマヘ）、相去等ハ險之角田白石、岩手、水沢、宮戸（ミヤコ）等ハ関之天下の險関ト一國の險関ト大小殊之へとも云ことも心持ハ差別な

きこへて知へし

○江湖海中等へ築出したる城ハ水際（キハ）江堤を懸ルもあり亦水際より十間二十間引退て堤土居等を設ルもあり各城主の方畧によるへし

○都て城にハ烽火臺を設置へし急ある時人數を集むへき為之烽火臺の制ハ山城ならハ山の高所に設ケ平城ならハ櫓臺の様に普請すへし卑キハ二丈高キハ四五丈なり臺上に方二間許、高二丈余に上の方を細ク塗込の室

を造り内より壁を厚ク附へし上をも空穴（ヤネナシ）にして明ケ置へし中にハ藁或ハ杉の葉を込て上をも蓋（オホイ）置なり急ある時ハ火を懸煙を挙て人數を集ル之但シ太平の日にも年に一度不意に煙を挙て人數を集メ烽火の容子を國人に呑込セ置へし但太平の日操練（ナラシ）の烽火にハ駈附（カケツキ）二十番目迄を称して褒美（ホウヒ）を与（アタ）フへし然トいへども紂王の所業に倣フ事なかれ亦軍記を見ルに急の合戦の時なとハ近邊の在家に

火を懸て遠近の味方に合戦有る事を知セしむる事数多有り、ケ様の時ハ幾口も火を懸ル事あり

○城取に十の習有り一に地形、二に塀（ヘイ）、三に堀（ホリ）、四ニ土居（トテ）、五に門、六に馬出（ムマ）、七に石垣（カキ）、八に横矢（ヨコヤ）、縄張（ナハハリ）、九に柵（サク）虎落（モカリ）、蔀（シトミ）、十に水溜（タメ）、亦各一條毎に格有り左に大略を記ス

○地形ハ上に云故此に不載

○堀に二有り水堀、乾（カラ）堀、水堀ハ水面より十間より二三十間迄に堀べし深サハ二三四丈に堀べし岸のころびハ一丈に四尺れ積なは べし但し土の性宜き所ハ是より急に堀べし

○乾堀ハ片藥研（ヤゲン）に堀之勿論城の方を深く堀あり

○都て堀ハ泥の深きを好む水深ク泥深キハ猶以て妙とす

○水なしとて水際（キワ）ばかり石垣にする事有

○塀（ヘイ）ハ土臺引ハ悪し掘込柱に為べし石の根

揆柱尤善若土臺引ニ為ル時ハ石土臺ニ為へし、矢狭間ハ長ク切筒狭間ハ丸ク切へし尤立狭間居狭間の高卑あり立狭間ハ立人の乳切ニ為し居狭間ハ居敷て肩長ニ切へし何レも内の方ニあかきを付ルへしあがきとハ内の方を廣ク塗事なり亦板狭間あり厚板ニ狭間を切て壁中ニ塗込ルへし

○扣柱の打様二ツあり筋違ニ打あり又塀より四尺計内江退て別ニ柱を立て上下二ヶ所ニ塀柱より貫を通して扣ルへし是を善トス籠城の時ハ上の貫江板を渡して塀外江矢炮を放し石打なとする足代ニ用ルへし

○塀の下江ハ一面ニ石を敷へし又急ニ塀を立ル時ハ壁下地の立竹を土中江七八寸ほと指込へし

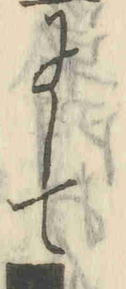
○築地ト云ハ性よき土を方四五寸長一尺計ニ打堅メ是を段々積上ケすきま〱江煉土を込なから高サ八九尺の塀ニ作ルへし

○石多キ國にてハ大石を累上あり〆其せきなきを煉土を以て打堅メて塀に為ス亦堅固なれども掘崩シ易キ患ひあり然レども大石ばかり累ルハ堅固ス

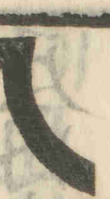
○異國にて磚ト云物を制して城の塀石垣等に用ルス其制好土を煉て磁器（セトモノ）の如ク火に焼て堅ムルス甚堅固なれば武備志にも其制法見ユ亦臺灣府志を見ルに安平城の條下に大磚（ヤキモノイシ）桐油灰共搗而成城高三丈五尺廣二百二十七丈トあり亦唐（カラ）山西人（サンスイジン）の物語を聞シに秦始皇帝の築ク所万里長城ハ西ハ流沙に起り東ハ遼東に至て長キヿ九千里（即日本道九百里ニ）高十丈廣二十丈にして土手（トテ）の如キ石垣にして其一磚の大サ或ハ二三丈又ハ四五丈にも及ト云リ妄リに聞ば山西人の虚談の様なれども餘大磚の制を考レば好土を長城の形に煉成（ネリナシ）て直に火を懸て焼ぬる物なるべし是蒙（モウ）恬（テン）ヶ造工の妙に出ぬるなるべし

○石垣に三等（ミシナ）あり野面（ツラ）打欿（ウチカキ）切合（キリアワセ）也野面とハ生レ儘の石にて築上ル也打欿とハ石の角々を打欿て築クを云切合とハ空間（スキマ）なき様に切合せたるを云野面打欿を粗（アラシ）トし切合を精（クハシ）トしス各其場所に隨て精粗の石垣を用へし尤大切の所ハ切合にして其上に石を甃ク事ありト云とも皆工人の傳ト成て武士に其事を知たる者無し石垣ハ築城第一の工なれど志ある將士傳授あるへき事也加藤清正ハ石垣の名人ト世に云傳たり思へし

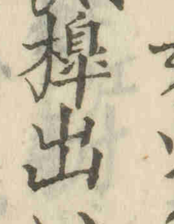
○赤石垣のかうだひに三等あり下繩（サゲナハ）緩（タルミ）捍出（ハネダシ）あり下繩ハ急直にして



如此あり緩ハ



如此にして急直なから捍出ハ



如此石垣の上際に椽の如く石をさし出したるを云也此石垣ハ築難キもの也ト云り朝鮮國の城々に此石垣多しト聞り

○土居ハ堀の土を上て築クへし且土居の高サハ根張の半分ト知へしたとへハ根張十間

なりとも高サ五間ト知へし
○土居江ハ香附・麦門冬・芝・小笹の類を植へき、土止の為ニハ根方ニハ枳（カラタチ）を植ルもよし
○土居ニ鉢巻ト云て上の方ニ計石垣を築事あり土居の大小ニ随フ事なれとも大躰六七尺内外ニ築クへし
○門ニ楼門あり草門あり楼門ニハ櫓門ハ都て城門ハ舛形を付て二重門ニ造ルを好トス
○都て城門ハ少ク坂を附へし一向ニ平地なれハ仕寄道具を附易きもの也
○二重門ハ内楼門、外草門なるへし
○楼門の二階を扉より六七尺も指出して造り且敷板ニ格子を設置て扉江附レ敵ニ石を落し炒砂（イリスナ）を懸ケ沸（カウシ）湯（ニヘユ）・穢汁（ツツミツ）等を灑クへし又焼草を積て火を懸ル様子ある時ハ早ク水を灑キ懸へし（楼門れ楷上ニ水ト石ト夥ク用意致置へし尤竃も多ク造り置へし）
○門の地伏の下ハ大石を敷置へし
○馬出ニ丸馬出、角馬出、堢（アヅチ）馬出、馬出無の小口、

舛形向小口等種〻の口訣あれども左の〻秘訣の沙汰にも及間敷、馬出の趣意ハ只人數の出ル所を早ク敵に見られぬ為、早ク見らるゝとも射すくめられて出がたき故物かげより、ひよと突出へき為の馬出なれど余り念入て普請するにも不及事に、

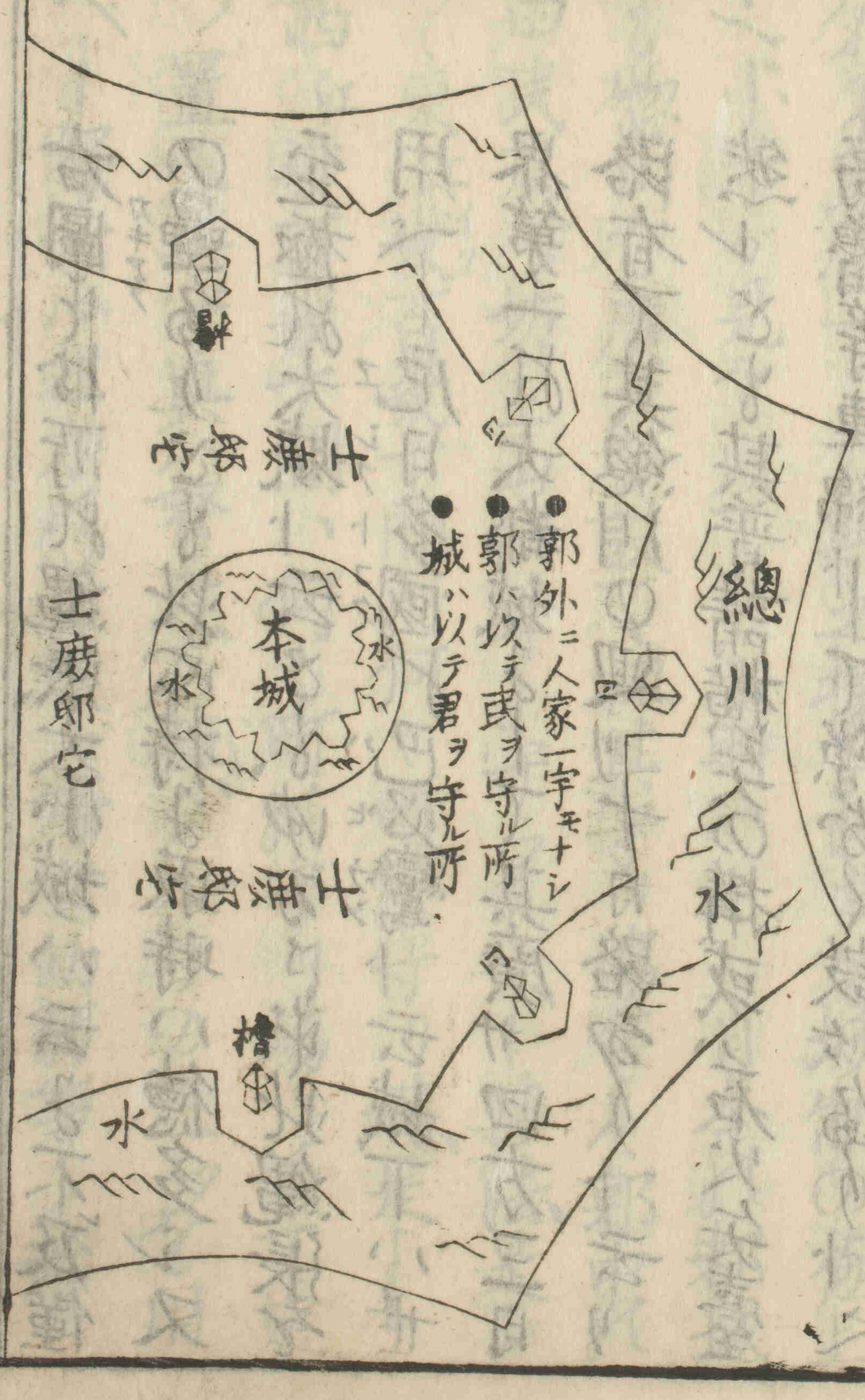
○馬出ハ堀にするもあり亦土居にも蔀にも宜に随て制作すへし

○横矢の縄張ト云ハ都て城の縄張ハ直（スク）に長ク取事勿レ二十間三十間にて折廻シて相互に横矢が届ク様に構フへし又地勢に因て百間も百五十間も直に長ク構ル事あらば二三十間隔（ヘダ）に幾所も出（ダシ）を構置て横矢の働が成様にすへし是惣縄張が趣意なり是に付て種〻六ケ敷ことを談スル者も多けれども左の〻奇妙の事にもあらねば只横矢のきくを奇妙とするなり

○ゲレイキスブツクに阿蘭陀を始メ歐羅巴

諸國の城圖多シ其繩張も横矢を第一ト構ゑて其圖は大畧を左ニ寫ス能考見べし

阿蘭陀流城池之圖左之如シ


總川
水
櫓
櫓
士庶邸宅
士庶邸宅
士庶邸宅
本城
水
水
水
●郭外ニ人家一宇モナシ
●郭ハ以テ民ヲ守ル所
●城ハ以テ君ヲ守ル所

右圖をは所の縄張、大小城ハ云ニ不及僅の壘（カキアゲ）なりとも此心持ニ取時ハ徳多シ又至極の大城ト云ともゆるさず此縄張を用べし尼日多國（ニシットコク）の巴必鸞（ハビラン）ト云城下ハ世界第一の大都城ニして其廣サ回方三日路有て其總川の廻り十日路ありト云り然レとも其普請横矢の構或ハ石火矢臺高櫓等連綿トして隙なく設ケありト之其普請都て百九十年を積て成就スト云

◎城制ハ右の如ク總川を廣大ニ設て總川の外ニ民屋一ツも無之様ニせるが城制の極上之小子が見を以てせる時ハ　日本の都城も總川を廣大ニ設て扨其守り場をも郭中の回民及ビ坊主山伏等ニ守ラせべし其法是より東江（イリ）幾百幾十間ハ何々町の守り場是より西江幾百幾十間ハ何々町の守り場ト兼て定メ置べし其守具ハ弩弓、石弾（ハじき）クルリの三ツを用べし弩弓ハ非力の者及ビ婦女幼弱等ニ強キ

弓を射サせるの具之其法彀張にて両足を弓江踏(フミ)懸て両手ニて弦を曳(ヒク)時ハ強キ弓も婦女子の類迄射らるゝ之石弾ハ仕懸物なれバ弩より心易し之クルリハ又一段仕易キ之稽古ハ其町〻の稽古日を定メ置て毎月一度ばく教ゆべし扨三器の用意ハ其町〻の役ニして連〻ニ調置て其町〻の名主撿断の所ニ預り置べし是惣川を守ルの法之本城ハ武士の守り所ハ百年を期せぬ此普請も成就させてべき之

○柵とハ木を一面ニ並べて埋(ウメ)貫(ヌキ)を通し置之虎落(モガリ)ハ竹を筋違ニ組合セて埋立繁(シゲ)ク縄(ナハ)を以て結固メ置之蔀(シトミ)とハ蕀の付たる木枝(エダ)ニて垣を為之柵虎落の二ツハ地形堅固ニして掘堀ニも不及所又ハ山の尾崎(オサキ)或ハ陣営又ハ普請場などニ用ユ蔀を何方ニても見透て悪キ所ニ用ユる之

○水溜とハ山城などニて水不自由なるゆゑ湧(ワキ)清水などを溜置為ニ或ハ池を構(カマヘ)又ハ水槽(ブネ)を設

て貯べし又清水も不出所なれバ水槽を数多
拵置て雨降時、簷庇或ハ地面を流るゝ雨水を
一滴も漏さず受留ムべし正成の赤坂にて設
たるが如し

○穢水又ハ糞汁迄悉ク溜置て城江附敵兵に
沸して打懸べし　日本の城制ニハ不浄流し
て悪水を悉ク流し捨ルハよろしからず溜池
を設て溜置其余ル所を流スべし
右城制ハ心得なりト云ことも此條ゝにて

車溝ト云よろしくバ異國　本朝の城
制諸書に詳ニ見合て工夫すべし茲に言
所ハ至極の大畧にして其趣を見スべき
為耳之

○陣屋壘居館皆城の類にして堀をもほり杭
遊をも設ケ馬出等をも附レども力不足にて
普請麁相なれバ城とハ云難し扨右の二ツ大
身なる土着士の居所ニ、土着の武士百貫以上
の家中も多ク百姓も数多なれバ居館の構縄

張等に心を付て普請を致し置變動の事あら
ば家中百姓等の妻子家財迄取入て乱妨の害
をも辟（サケ）させ又ハ其を張て押通ル敵をも喰止
ムへし大に國の居トなる事也近來一國一城
ト云事に成て國持大名も僅一二城に不過古
ハ和漢ともに大國の諸侯ハ城を三十も五十
も構たれは事諸史に載りたり此故に變ある時は
相互に援助し故持こらへがたき國も久く存
シたる事數多あり可見合元來溝を掘柵を振

たる計にても城ト云とも只國の大小祿の
多少に因て普請の精粗ト大構ト小構の差別
迄の事也扨遠國の事ハ不知仙藩封中にて古
昔以來天正の頃迄此（コヽ）の城其の舘（タチ）ト云シ所の
址（アト）五百三十余ヶ所ある也今其城址を見に唯
見形に便りて少計溝掘等を構又ハ柵を振或
ハ植木などして門に少計杭違等を設たる事
トのミ思ハるゝ也是皆古代土着の武士面〻
の住所に心を用て普請を致置事ある時は家

中も百姓も一固（カタマリ）ニ成て武を張ぬる事ニ今とも
此心持ニ國法を立て武を逞クせる事掌（タナコロ）ニ運（メグラ）
スガ如クなるべし夫武を逞クせる事も聖人
の道ニして和漢の差別ある事ニあらず然ル
ニ武を逞クせる事ハ人を多クせるニあり人
を多クせる事ハ武士を土着せるニあり武士、
土着して人多キ時ハ壘（カキネ）も居館（キヨクハン）も保（タモ）チ易（ヤス）クし
て國家れ助（タスケ）少シトせず此心持を孔子も足食
足兵ト宣イ又庶富教とも説（トキ）玉へて將ぬる人
能思べし

附り都て城中ニも篦竹を多ク植置べし
矢の料ニ用べき為ニ尤弓工、銃工、矢工、鍛
冶、等を足輕の兼役ニ仕込置て用を足ス
事ハ段々言シ如クニ能心を配ルべし

第十終

海國兵談第十二巻

城攻並攻具

城を攻ル事ハ止事を不得して攻ル也、其謂レハ元來城ト云ものハ地形に便リ堀塀を設ケ遠キ敵をバ弓鉄炮等の飛び道具にて打拂ヒ、近キ敵をバ鎗（ヤリ）長刀等の短兵（タンペイ）にて切伏ント堅固に構（カマヘ）たる所江外より仕懸て其城を乗取ントする故、人數も多ク損傷（ヤブル）し又國内の人民も苦ム事也、此故に城攻をバ為さゞる覚悟なれども

敵要害を固メ根本を堅クして暴乱を遲はせる
をもて捨置事も仕難キものなれど止事を不得
して攻ルには扱攻ル時に至てはそれ術に巧拙
あり能呑込ざる時は人數を損ずるのみなら
ず却て害を引出ス事あり將たる人詳に會得
あるべし

○城を攻ル事ハ敵より五六陪の人數にあら
されば攻られざる事ニハ然ト云ども時宜に因
て小勢にて不意に攻懸リ或ハ鷹野なぞに事
よせて徒膚攻なぞにても仕懸、又ハ夜討等を仕
て城を抜事ありしことも皆臨時の權變にして定
法にはあらざる也

○攻ルト攻ラるゝハこれ差別を云バ攻ラる
るものは小勢なれども已レが國なれば按内
も能呑込兵粮水薪の便りもよく後詰の頼も
あるなり攻ル方は大勢なれども他國の事な
れバ萬事不按内にて諸方不便利ニハ尤兵粮の
不續事もあり又長キ間には流言なぞをも得て

味方割（ワル）れする事なども出来て騒動を生ずるもあり彼是以て不便利の事多キ也且又籠城する者ハ必死ニ極ル故人は心氣も一齊ニ、攻ル方ハ大勢なる故ハしする城兵を侮り驕りて油断も出来ルもの也兎角、城を攻ルニハ籠城の思ヒ入レを呑込、籠城するニハ攻手は思ヒ入レを呑込時ハ守攻共ニ拙キ事あるべからず

○上ニも云如ク城を囲ム事ハ敵より十陪も多キ人數ニて取懸ル事なれバ隙（ヒマ）なく囲ルゝ事なれども態ト一方をば明（アケ）置事、城を囲ム習ヒ也四方隙なく囲ム時ハ死地ニ陥ル故城中一致して必死を覚悟ニ守ル時ハ落べき城も落兼ル事あり此故ニ一方を不囲して城中の氣緩（ユルミ）ル時ハ人散じて城落易し

是ハ敵将を目ニ不懸只城を奪ヒ地を畧するを専一とする時は攻方ニハ亦敵将を不討で勝ニ定メ難キ合戦の時此城中ニ

敵将の在を慥に知得たる時なりとも四寸一寸の隙もなく取囲て城共に丸呑に為（ナシ）城中を鏖にして根を斷（タチ）葉を枯ス事もあるへし單于が漢の高祖を白登城に取囲志を此趣意へ然レども單于無智なる故陳平に欺レて高祖を取逃したり思へし

○城を攻ルに數（アマタ）の心得あり敵弱ク粮米も不足にて後詰（コツメ）の氣遣もなき城ならバ打囲て兵威を示レ不断（タエ）小拆合して城を疲（ツカラカ）レ己レを全クして夜討なとに不逢様に用心して久ク囲む時ハ力を不費（ツイヤサ）して城落ルト云り

○敵強ク粮米も多ク後詰も來ルへき城ならバ短兵急に攻懸ルへし遅ければ内外より挾（ハサ）ミ討レて大に難を受ル事なり此故に急くに落城有間敷見詰ル時ハ速に囲を拂て退ク事もあり時宜の權謀に因へし

○山城なとハ表通りのミ普請を丈夫に構て後（ウシロ）ハ山を恃（タノミ）て普請を加さるもあり其様子な

らバ前より手をごとく攻懸り別に人数を後(ウシロ)の山江廻シ、笠(カサ)より落レて破ル事あるべし右の外、城により時により、敵により勢の多少にも因て種〻の攻方あるべし筆紙に盡シ難キ所ハ多ク軍記を讀て自ラ極所に至ルべし

○城中の計策にて寄手に日数を送ラスべき為に種〻の方畧を施ス事あるべし明に察シて取をかゝるべし

○敵地江踏込時ハ村里の人民軍兵の乱妨(ランボウ)を患て家財妻子を引纏(マトイ)逃隠(ノガレカクレ)レて且恐レ且怨ム也然ル故に敵地江踏込てハ軍兵の乱妨を嚴に禁シ國民江指も指せぬ様にすべき事也扱人民等逃隠レゐらバ處〻に高札を立て嚴ク軍兵の乱妨、不作法を禁シゐり早く立帰て住居せよト云趣を書付べし若違背して乱妨せし者あらバ立所に斬て其處に梟首(ハリツケ)シ其地の人民に安堵なさしむべし如此なれバ敵國

の人民信服して思ひ付にハ清正此所を呑込な
る故朝鮮の士民親附して軍士ト親ク交リシ
故清正の軍士ら陣用ニ事欠事なかりしト聞
及り清正の軍法貴へし

○城を囲シトもは時ハまはゞ後詰れ来ルへき
道筋を考て別備を設ケ押の人数を置て其後
城を取巻へし

○城攻の時、向城を二三ケ所も取事あり其普
請も馬防の溝を掘、虎落を振て事足ニハ随分便
利なかりしこく取へし

○城近ク押詰てハ必油断もは事勿し蟄際（ツボミキワ）れ
一戦とて名残の一軍して引籠ル敵あり此一
戦ハ寄手を散ス然己レ追籠（コメ）らるゝ然ト運固（ウンガタメ）
の軍なれハ一段手ごはきものト云り心得あ
るへし

○城近ク陣を張ニも城ト陳トの間ニ森林なと
ありしも其蔭ニ陣スへし城より直ニ見渡ス
所ハ大筒の氣遣あり

○城ト陣トの間ハ定法なし云ども近キハ五六町遠キハ十四五町なるべし尤敵城に近附て陣を取時ハ繁（シゲ）ク物見を置て敵城の様子等を注進せしむべし

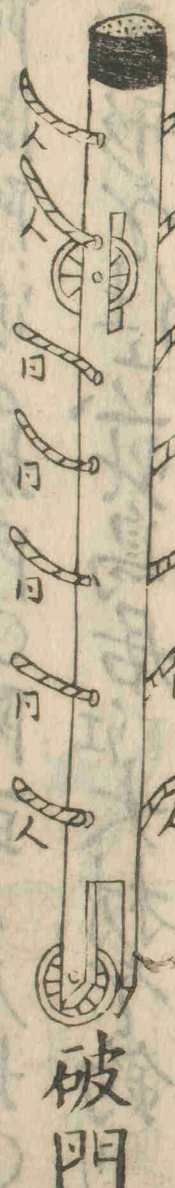
○城攻る法當時諸軍家の傳授にも攻具殊の外不足之堅固なる城程攻具拙クてハ抜難キ事なれバ傳授受るに攻具の外にも猶書籍を考見て了簡の上城地の高卑又ハ普請の巧拙等に因て新制作あるべき事良将の器ト云べし

○城攻にハ門を破ル事塀を倒ス事石垣を掘（ホリ）崩ス事にありされども破レ口附さるれバ此故にまた此三所を破ル工夫を為べし然しながら門塀を破り石垣を崩スにも寄附されバ叶さる事也此故に先仕寄道具を制作する事第一の事なりと知べし

○仕寄道具ハ厚板にて箱を拵へ車を仕附て此箱の中に人を込て仕寄ありハ亦一等精キハ右

の箱れ外面を生牛皮（ウシノナマカハ）、生野猪皮（イノシヽノナマカハ）ニて張固メて用ルあり又大楯（タテ）ニ車を仕附て十四五六人一齊ニ推寄あり、持楯（モチタテ）ニて押寄あり、竹束（タバ）ニて仕寄あり又阿蘭陀（オランダ）流ニて被楯（カブリ）あり、生牛皮ニて持楯の如ニ拵、仕寄時ハ腰を傴（カヾメ）て是を指上ニ被（カブリ）首より尻迄覆て數百人連續シ手ニ手を取組て城江寄付事あり此等の器械猶工夫の上制作あるへし

○城門を破ルニハ廻り三四尺、長三丈計の大材の頭を鉄ニて張固メ彼ノ大材江車二ヶ所仕附、大材の左右ニ數ヶ所綱を附、五十人ニて此木を牽（ヒキ）城門江推向（オシムケ）て一齊一力ニ突懸て打破ル、尤此木を牽（ヒク）武夫ハ人毎ニ持楯を持て矢石を防かし仕寄へし扨門を打破ルニ於ては材も楯も打棄（ステ）て無二無三ニ城内江切込へし是を大切トス重賞（ヲモキホウビ）あり

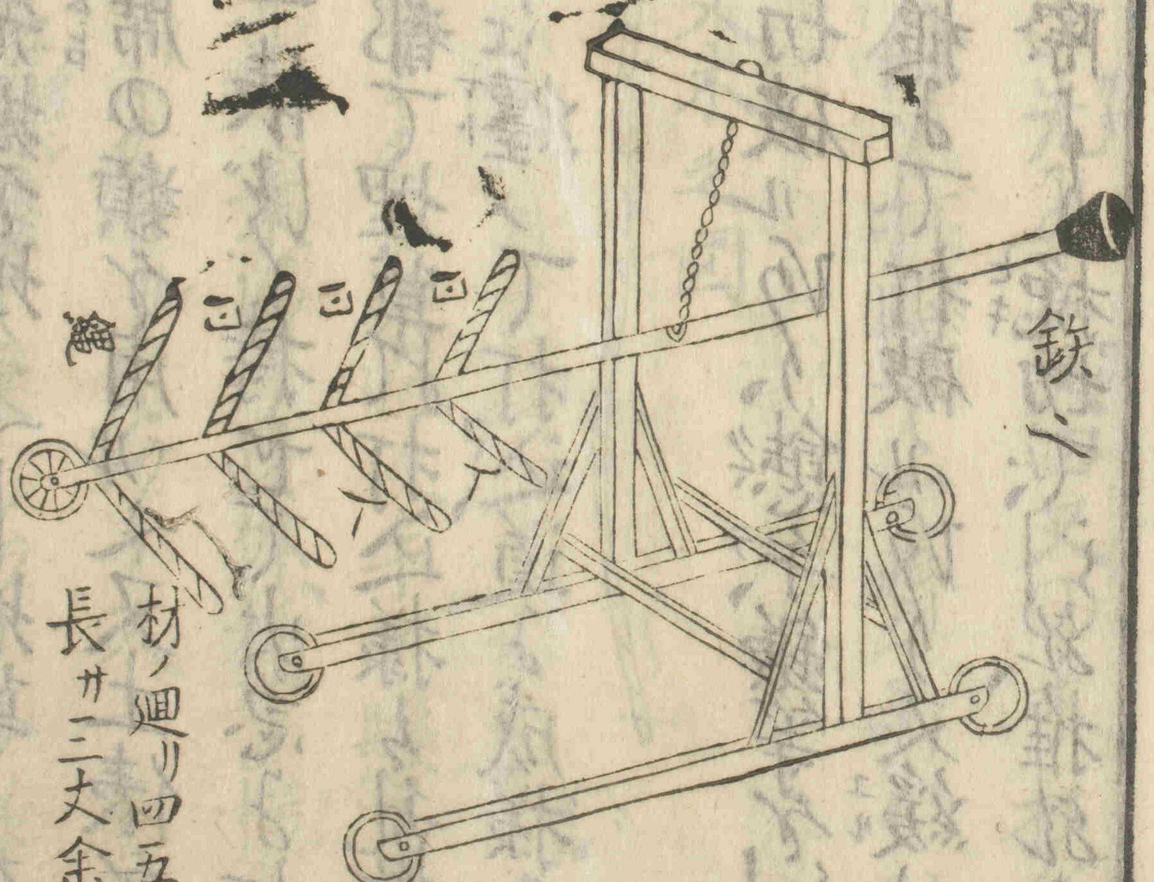


破門材之図

○亦阿蘭陀流に城門の際或は石垣の角の所江鳥居形を仕立、此鳥居江大材を釣リ其大材の端に引所に車を仕附て走リを鈷し鐘を撞（ツク）仕懸の如くして扉を打砕キ又は石垣の角石を突抜（ツキヌク）事あり惣して此類の制作猶工夫あるへし

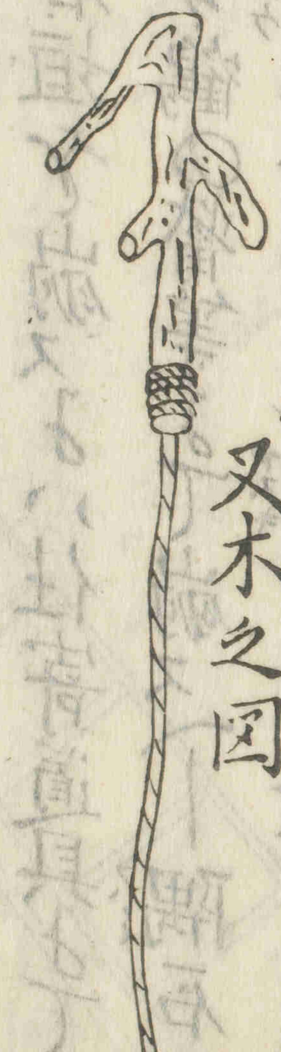
○柴薪を門の際に積累（ツミカサ子）て火を懸、城門を焼破事あるへし又捧（ボウ）火矢、数火矢、乱火矢等を以て焼破事あり其法は第一巻目焼討の所に委し

鳥居撞の圖



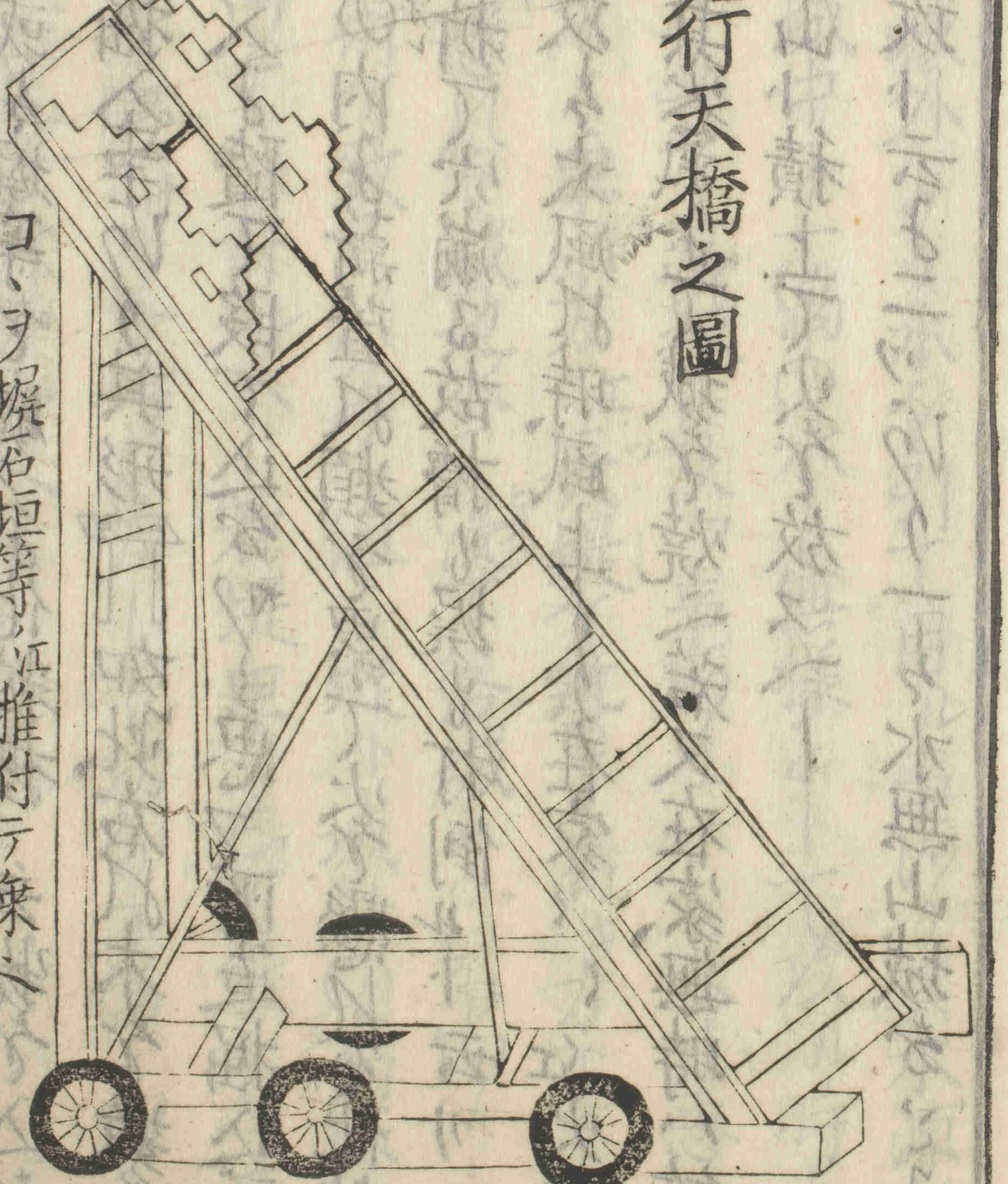
○城ヲ攻ルニハ先堀ヲ埋ムヘシ埋草ハ在家ヲ毀チ柴萱畳席の類ヲ用ル又土俵ヲ夥ク拵ヘ數千万人ニ一俵ヅヽ持セテ火急ニ打込テ埋ル事モアリ都テ埋草ハ打込様ニ乱散ニ打込事勿レ一所ヘ纏メテ打込道ニ成様ニスヘシ

○塀ヲ破ルニハ切破ルアリ又熊手鑓等ヲ以テ懸テ引倒スアリ又大槌ニテ打破ルアリ又緩キ時ハ柱ヲ二三四本土際ヨリ挽切テ、引乱推乱モシテ倒ル、又細引の先ニ三叉四叉の木枝ヲ結付テ百條モ二百條モ打懸テ一齊ニ引テ引倒スト云リ



又木之図

○塀ヲ乗ニハ階子ニテ乗アリ手ヲ懸テ乗アリ又行天橋ト云物ニテ乗アリ此外楯ニ横木ヲ打附テ階子ノ代リニ用ルモアリ又一本ノ材木ニ刻ヲ附テ塀ヘ倒懸テ乗モアリ各様々、

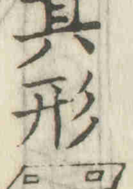


行天橋之圖

コレヲ堀石垣等江推付テ乗ル

大佛定直千劍破(チハヤ)城を攻ル時二十余丈の梯(カケハシ)を造て切岸江打懸ある事もあり考べしゲレイキスブツクニ守攻ル具甚精詳也見合て制作あるべし

○石垣を崩スニハ仕寄道具ニて寄付(ヨリツキ)、鉄手子(カナテコ)又ハ鶴の嘴等ニて崩スべし隅石(スミ)を一ツ二ツ掘抜(ホリヌケ)ば余ハ崩レ易(ヤスキ)もの也清正此働を得手ありし亦上ニ出セル鳥居撞(トリヰツキ)ニて崩スべし

○櫓或ハ塀等を崩スニ化粧（ケシヤウ）棚（タナ）ト云物を込なから掘入事あり其形如此右の木を數多拵掘入ニ随て段〻込なから思フ所迄掘込て扨穴の内ニ薪苣の類を累て火を懸れバ化粧棚焼折（ヲレ）て穴崩る故櫓も塀も打倒ルト云り

○火攻ハ大風の時、風上より在家〻〻江火を懸て其火氣ニて城を焼へし若又在家無時ハ竹木を山ト積上て火を放スへし

○水攻ト云ニ二ツあり一ハ水無山城なとニてハ城外より水を引て用ル事あり其水源を断切城中ニ一滴の水も無様ニして攻ル時ハ沽渇ニ苦て落城ニ及フ事あり一ハ水吐（ハキ）悪き城地をバ卑き方江長堤（ツヽミ）を築て高き方より水を注（ソヽキ）懸れバ城地水ニ浸（ヒタツ）て落城ニ及事あり太閤此術を致されしなり但し堤ト城トの高（タカ）低（ヒク）ニ術を以て能計ルへし若堤卑クして水を注ても城を浸さゞる時ハ労して功なきのみならず千古の笑トなるへし

右の外、攻具攻様幾許（イクバク）もあるへし時に臨て制作もへし攻具の制作も新規に致サまさる程の拙サにても所謂果敢（ハカ）〻敷（シキ）軍ハあるは間敷へ扨右の外に城攻に心得へき事ともあり左に記ス

○城攻に鉄炮を連放（ツルベハナシ）貝大鼓等を鳴シ一斉に攻懸ル躰を見セ又諸方の攻口江人数を向て不断（タエ）取合セスに忍を入て城中を騒動させ又に火矢大筒等を打懸て膽（キモ）を冷（ヒヤ）させなとして

新手を入替〻昼夜三日も悩ス時に城中大に疲るもの也其塩合を能見定て惣懸して手むごく攻ル時に利ありと知へし但シ如此攻ル時に人数を数百手に分て役定メを為て働へし

○城中より和睦（クホク）降参（カウサン）等を望む時ハ能真偽（マコトイツハリ）を察シ事情を明メて了簡を廻シ取扱へし後詰の来ル迄日数を送ルへき為に如此計ルあり又油断させて不意を討へき為に如此計ルあり

て能〻察スヘし

○敵将城を出ておめ〳〵と降参する事もあるへし真の降を殺スも不明ハ偽の降を助ルも亦不明ハ初メにも云如ク降人の甲冑又ハ時勢等を能考計て取扱へし是を明察ト云

○城中の大将分腹切て残ル人數を助ケ度ト望ムもあるへし城を渡シて明（ア）ケ除（ノキ）度ト望もあるへし是又能察シて越度なき様ニ可取計

○兎ニも角ニも此城を枕トして討死ト覚悟を極ル敵もあるへしえあもの突て出ル敵もあるへし後詰を待敵もあるへし能敵の模儀（カタギ）ト事情トを察シて取扱へし

○城を落シてハ城中の人を憐て軍兵の乱妨不作法等を厳ク禁シて安堵なさしむへし又ハ時宜ニ因て城中の人をも悉ク出シて味方の列ニ入レ城江ハ別ニ武功の者ニ人數を添て入置事もあるへし

○降を請者ニハ或ハ領地を取上て余計を助ケ

ルもかばへし又ハ半地又ハ本領安堵の約束等時宜ニ因へし

○大ニ猛威を振ヒ近國を震動せば時ハ大祿の者ハ所領を失へき事を恐レ小祿の者ハ虀（ナマス）ニ成へき事を恐て必死ニ思ヒ詰、降参も致サざるもの、箇様の時ニ城〳〵館〳〵を悉ク屠（ホフリ）落サントせば時ハ日數も懸り人數も損せばものへ此故ニ軍略者ハ其張本人さへ仕伏セて置る上ハ自余の者ハ命ハ云ニ不及、所領どもニ

只今迄の如くかばへし安堵致シ早〳〵罷出て大將ニ可謁ト所〻ニ高札を立て寛仁の腹中を示スへし太閤の九州攻なと此心持なり

右城攻の大畧之猶古蹤を考見へし

第十一終

海國兵談第十二巻

籠城並守具

籠城ハまづ大将たる者覚悟を極ムへし元来籠城の趣意ハ大敵吾が國江押来レども味方小勢にて對應（タイヤウ）ならざる故、地形を人数の代りに用ひ、引籠リ居て敵を討ル事也又大敵ならずども度くれ軍を仕損て籠城に及フ事もあるべし扨籠城ハ善守て城を拔（ヌカ）レざるを主トせる事なれバこそ守ルにのミ泥ム時はいかにも請

太刀に成ては忽なく攻落（セメオトサ）るゝもの也此故に兵を知者の籠城は或は城中より夜討を仕懸又は敵の油断を見切て不意に突懸り或は根無言を風説して寄手の氣を疑せなどする事のはかりは城中仕懸太刀に成て敵を請太刀に為べき術也是良将の籠城也

◎籠城に大将の覚悟と云は必死の覚悟を極ル事也初に云如ク大敵に囲まれ又は度〻軍を仕損じ精力盡て籠城に及事なれば運を開ク事は覚束（オホツカ）なき事なれども能必死の覚悟を究メ能守攻の術を呑込て守ルにのミ不屈能臨機應變して敵を計ル時は寄手を追崩て運を開ク事もはかる也尤大将必死の覚悟極ラざれば籠城も詮なき事也面を搔撫（カキナテ）て降をなしべし

◎籠城の時番頭以上歴〻の諸士必死の覚悟を極メ兼ル者をば実美評定と云て歴〻寄合て餝りなく評議して愈極メ兼ル者をば実意

を以て落レ遣スべし然レども其德無して妄りに仁に似たる事を行へども其虛に乘レて敢勇の士も臆病心を生レ皆落支度に成事もあるべし然ル故に必死を極メ兼ル者を切棄まして諸歷々の心氣を引立ル事もあるべし此所ぞ大將の德ト不德ト明ト不明トにある事也扱尋常の軍士亦ハ倍卒等必死を極メ兼ル者をば五人組より其わけを言上して落レ遣スべし但レ訇リ辱（ハツカシメ）て恨を含（フクマ）しむる事勿レ恩言をいひ含べし或ハ運をひらかせて帰參せよなど云含ムべし如此なしては其人ハ出テも恥ぬ心にある故城中江讐（アタ）をもなす事なきものなりト云り

○籠城ハ人和第一之地之利不レ如二人之和一ト云て何程要害（ヤウカイ）善（ヨキ）城に籠ルとも上下不和なる時ハ内より破レを生スル故持怺ル事決して不レ成事也扱不和とは疑（ウタガウ）間數人を疑ヒ罪（ツミ）もなき者を罪シ与間數にあるべし可レ与ニ不レ与可

賞（シヤウ）を不賞、賞ス間敷を賞せしの類之是等の事あれバ下たる者ハ上を怨ム、之下たる者上を怨メバ諸士、ふて心附て何事も精ニ入ル事なし、精ニ入事なき故守術もおろそかニ成て敵ニも破フレ又内乱起ても生スル之此故ニ鉄桶（ノロカテツハコ）の如キ堅城ニ籠ルとも人和を失へる大将ハ忽チ踏落サるゝト知べし然ル故ニ籠城第一の道具立なる人和之ト古の名将たちの言置し之扨人和ト云ニ世人の心得違ありハまゝ和ト云之ハ上カラ訳（ワケ）もなく柔和ニして詈罵の声なく此ニ小恵を行ヒ彼ニ小憐を加フ下たる者も何の謂もなく上を親ミを悦ビ其上朋輩同寮迄も異言なく睦（ムツマジ）ミなるをのミ和と心得之是も和なる事ハ和なれとも樵老漂母の和ニして城主の和ハ別種之借城主の和ニハ軍士悉ク智仁勇の趣を呑込法を守り果敢を旨（ムネ）とし人々皆勇ニして

和も是武将の和ニ樵ㇾ老漂母の和ニは天地懸隔なり

⊕篭城するには蟄際の一戦有べし其趣意城攻の巻に云ル如ク云々ものの利を失ヒ段々推詰られて篭城に及ブ事無是非次第無念至極なれ共對應する事もなく赤面を掻撫て降参も仕難き趣意有ㇾハ一二ヶ不論引篭る事なれ共未ダ城を敵の不圍以前に逆寄に蹶散シて敵を拂フ事も有ルなるとハ不拂共武運傾て引篭ルなれ是非に名残の一戦と思ヒ詰て手ひどき一軍をするこそ倚戦べき圖ハ敵の折着べき場所を見切て未ダ後勢の着到せざる所を討べし次に城近ク押寄ても未ダ列レツを不成所を討べし次に夜討をべし夜討に回の圖ハ夜軍の條に詳之扱此一戦に召具ス人数の中にも勇敢の者を撰て短兵急に取懸ルべし騎、歩ハ臨時の見合次第なり

⊕主将の留守ハ人数も不足なかもれなし變動の来ひりこし十に八九ハ防戦の心懸な

るべし然ト云ども時宜ニ因て、早く人数を出して打拂事もあるべし留守城代の戦畧ニあるべし

○日本諸流の籠城ハ多ク、城下の商家亦ハ近村人民ハ穀帛塩噌並ニ薪ニ成べき物或ハ耜（スキ）鍬（クワ）の類迄悉ク城中江取入て運を開く一陪ニあて返スべしト約束を定ルト云り、ケ様の事ハ已レより民心を離ス仕形ニて不出來（フデキ）なる事なれど褒（ホメ）ざる事にあらじ然ト云ども當時

日本風ニて蓄積（タクハ）の政ニ蹤なれど箇様の事をも為て粮兵布帛塩噌等を用意せるニもあらざれど外ニ穀帛塩噌等を畜ル術なし此故ニ政道の沙汰もなく差置て　日本風ハ籠城ニも箇様の事を手間（テマ）疾（トリ）せる事籠城第一の支度なれバ、正成近江國の穀を取て獻山江預ケ置ぬる事も此心持なり扨右ハわけなれバ故急ニ臨（ノゾミ）七轉（テン）八倒（トウ）して運ビ入（イル）るより積年の心懸ニて連々ニ貯置ど籠城ニ臨て騒動せる事

もせし其蟄際も立派なるへし是亦城主肝要の心懸なるへし

◎上にも云如ク城下並に近郷の穀帛を運ビ取事なれども火急の籠城又ハ饑饉年の籠城にハ運入へき米穀もなかるへし然レとも大變に備に兼て蓄積へおくへき事ニ扨米穀を貯ルにハ粟にて俵なしに直に箱倉江入て貯へし數十年を經ても虫喰ざるものなり（六尺四方の箱倉に三十石を入ハ）勿論祿に應して籠ルへき人數を兼て計り置て粮米を貯へしむることまた千人籠ルへき見詰なしまた千人一年の食ハ現米五千俵粟にて一万俵ハ右の積りにて上ハ三年分中ハ二年下ハ一年の貯あるへし斉の田單ハ二年城を持怺へ雲州の尼子ハ六年籠城しぬれて是人和卜粮食卜の二ツを得ぬれバ故ニ貴ブべきの至なり

◎粮食の事ハ和漢其説多けれど新に説に不及事なれども初学の為に大畧を言ハ先粟の

事を始に云ルク如し其外粱稗麥及ひ黍稷大小豆皆貯べし又糒を好トも糒ハ百年を経ルとも朽損なきものに候へ小子安永中に万治年制の糒を食て試たり只其性軽ク成のみにして曾て異味なし此外乾肉乾魚乾菜木の実等迄貯へし〇塩ハ大瓶に入て貯レバ一塊に成て百年をも有ものに候へ是又万治の塩を見たり〇味噌ハ塩を強クして三年味噌に仕込四年目より順繰に取替へし〇城中にハ栗ト澁柿を多ク植へし栗ハかち栗に造り渋柿ハ釣乾に造ルへし亦一飢を救ふへ〇粟ト糒トハ収納の二百分一を年々貯へし二百分の一ハ万石より五十石を貯ル事なれバ心易キの至なり但し是程の貯も致レぬ程の不經濟なりせバ所詮軍もよしなき事ニて城を進物にして早く匹夫ト變ぜるも可然候へ〇籠城に外の味方より兵粮を送り来ルとて猥りに人夫ともに城中江入込しむる事勿レ味

方の割符合印等を見合せ俵の中を改〆て後城中江入シムヘし油断せば事勿レ正成ハ甲冑兵器等を俵にして敵方の者の真似（ネ）して湯淺が城中江運び入レ、入り済（スマ）して後俵の中より兵具を取出して物の具固〆城中を切立て其城を落したる事も有れば能心を附べき事ぞ扨又兵粮入れ時附入をも心懸ル敵あり其様子ならば早く門外江人を出して俵の中を指改〆真の兵粮ならば早く引入べし然レども其人に油断せば事勿レ短刀にても挾（サシ）來らば其短刀をば奪取べし其外心の附様種々有べし怠ル事勿レ

○上に云如く粮米も多く人も和し守術を巧みにして數年城を落されざるも善なる事は善なれども只持懸（コウ）なるばかりにては善（ゼン）の善

○これ云難し持懸なれば上に能計て寄手を追拂を善の善ト云ヘ然レども是も至極の妙所へりぬこひ敵をば拂ひぬるにも二三年も城を持懸

ル事中〻凡将のおよバざる所ゆへ籠城の将帥能〻思へし

○城門を開て討て出べく思ふ時ハまづ矢炮を發し又ハ石なとを落し懸て敵の四度路（シドロ）ニ成を見すまして脱兎の如ク突て出べし 但騎歩ハ地形と時宜ニ因べし

○籠城ハ一曲輪（クルワ）切ニ討死ト思定ムべし 三の丸より二の丸二の丸より本丸ト次第ニ引入るのよびしくハ是籠城第一の覺悟之

○境目の城を敵より囲ム時ハ本城より時日を移さず後詰を遣ス事なれバ是非持懸ル事境目城番の覺悟なるべし

○籠城して敵を悩スニハ度〻夜討をせざるニ如なし 但引返して入ときハ小口ニ迎備（ムカイ）を出し置べし

○搦裏（ウラ）人數配りハまた搦裏ニ役所を懸なるべし頭〻の旗馬印等ハ面〻の役所の前ニ立置き人數組ハ上ニ云如ク愈嚴密ニ定メ置て笠立

冑等の相印も省（ハブ）ク事勿レ扱人數を塀一間ニ三人づゝ配ルへし倍卒無（ナキ）人數組ならば五位二十五人に塀裏八間、百人頭一組に三十二間守スへし亦倍卒なる人數組ならば一伍五人を一組トして倍卒の數を計りて塀一間に三人の割にして塀裏を渡スへし勿論人數有余ならば一間に四人五人も配ルへし但塀裏に板を懸て誰組某（ソレガシ）々守り場ト書付へし倍卒なる時は倍卒の數も面々の名下江書付置へし

○右の如ク塀裏人數配りを定メ置て如何（イカ）なる變動（サハキ）ありとも已レが持場（モチバ）を立去事勿レ下知なきに立去者ハ罪ス

○士卒十人に一人の頭を添て都合十一人、是を一組トして一丸に二三組乃至（ナイシ）十組も設置て不斷塀裏を見廻り寄手、手ぬるく攻懸ル所江本人數に加ツて防クへし此法甚便利なる人數定メ之

○平生敵の攻寄さる時ハ倍卒無の組を二十

五人より三人ばかり立番にし倍卒なる組に一伍の惣人数より三人ばかり立番をすべし但し倍卒のミ立番に用ル事勿レ五人の主人の内一人ばかり加りて勤ムへし夜も同前也但夜中に遊軍の中より助の夜番を出スへし都て此物見立番は甚大切なる役也怠ル事勿レ

○敵攻めくる時も堀裏の人数申合て半（ナカハ）ばかり甲冑すべし怠ル事勿レ怠ル者は罪ス

○遊軍も四組なれば二組ばかり替り番に甲冑をすべし是又怠ル事勿レ

○昼夜ともに立番夜廻りの者敵の攻懸ルを知て相図の鳴物を鳴させ本人数遊軍ともに甲冑を脱（ヌイ）て休ミ居る輩も早ク物の具固メて各持場江相詰べし怠ル者ハ罪ス一

○夜廻りには足軽を用べき事なれども惣人数疲レぬれば亦は軍士不足なる時は百姓町人等の物に動ぜぬ老年の者を用べし是は三人を一組トして十組も二十組も設て東五組

西五組に分て定置昼夜引も不切塀裏を廻ルへし尤一曲輪切に設置へし扨此廻りの人数は塀裏の本軍士ト相横目に成て互に懈怠を戒むへし

○百姓町人の壮者を撰て二十人を一組トシ頭一人添て是を火消役に用て一丸に二三組も設へし扨城中失火又ハ敵より火矢等を打懸ても塀裏の本軍士ハ云に不及遊軍迚も少も火の方江拘ル事勿レ愈持場を念入て守へし扨城中ハ云に不及城外なりとも失火焼亡ありとも夜中なりとも惣人数ハ起て甲冑をぜト

籠城の趣意又人数配の手わけて等右にて大槩事足へし是より下守法守具を記ス何レも工夫を加へし

○塀裏の扣柱の上の貫江板を渡して矢炮を發シ石を落ス足代に為へし石打の役ハ百姓町人又ハ倍卒の物馴たる者を用へし

○城中の小路々に虎落を結置印無者ハ

通行せしむ事を禁ズ忍者を防ク用心ニへ
○塀裏ハ一間ニ三人ハ積りあれども道具も
不足ニて思フ儘ニ發シ難キヘ然ル故ニ手ゑ
ごく寄手を射ちまさんと思フ時ハ塀裏一
間ニ鉄炮三挺弓二張矢五十本玉三十ほと配
リ置大敵攻寄時塀裏の足代又ハ狹間よりす
き間なく發シ懸へし敵甚そるゝしと
⊙塀裏ハ武者の守ル所もあり足軽の守ル所
もあり又百姓町人等の守ル所もあるへし人

数ハ多寡ある城の大小ト大将ハ方畧トニよるへ
し

籠城ニ用意をすべき品々

○塀裏ニ六七百目より四五貫目迄の石を影
ク積置べし大石ハ落シ懸て近寄者をひしぎ
小石ハ石弾ニて飛せて敵を悩スへし
○砂石を多ク積置近寄者江炒て打懸へし
○穢汁ハ糞汁溜置沸シて敵江灑キ懸へし
○乾土ト灰ト相和シて貯置へし近寄者江振

ヒ懸しむ目鼻江入て難儀させる之

○塀裏ニ五十目或百目の大長筒を設置て大将を狙ひ打ニせへし但し長サ八九尺が防禦志

○門、櫓（ヤグラ）其外諸役所及ヒ倉廩の近邊ニハ水槽（フ子）水桶、等又ハ溜池等を設て水を貯置へし火矢大火等の用心之へ

○藁を竿（サホ）の先ニ結付て火を消（ケス）具ニ用へし

○龍吐水（リウトスイ）水弾（ハチキ）の類用意いるへし又古き椀（ワン）を

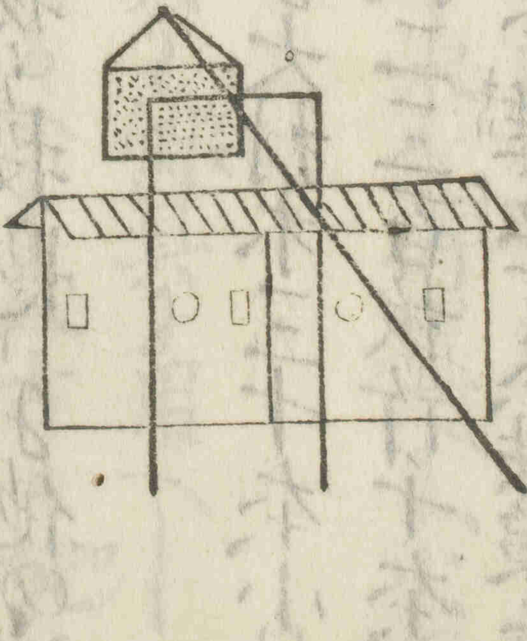
夥ク貯置へし水を掬（スクフ）て物江投懸（ナゲカケ）ルニ他の器物よりハ一段よ宜敷もの之

○塀裏ニハ折目く毎ニ大材木二十本小材木百本大板三四十枚小板二三百枚竹十本土俵二三百俵縄十尋（ヒロ）大釘万本錐（キリ）五十本鉄鎚（カナツチ）五十鋤（スキ）鍬（クワ）五十挺ほと鑿（ノミ）鋸（ノコギリ）斧（ヲノ）大槌（ヲツチ）等悉ク用意いるへし塀石垣等を打破られる時、急普請（キウフシン）ニ用ゆへき為之

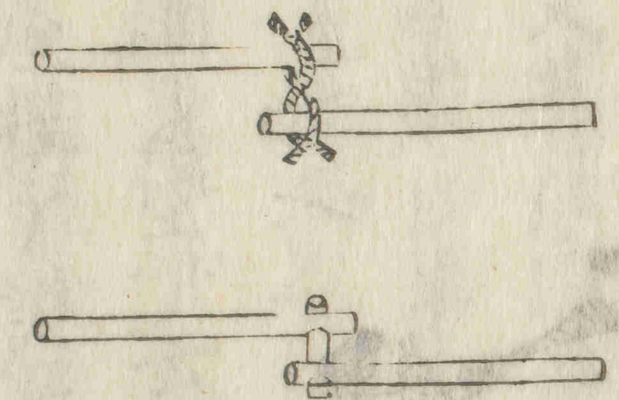
○厚綿の蒲団（フトン）様の物又ハ藁錯（子コツ）の類横六七尺

長五尺余ニ掾塀の上より四五尺向江桔槹木（ハ子キ）ニて指出シて矢炮を防キ其身ハ塀の上より架出シて塀石垣等れ際（キハ）江寄付ク敵を討へし

桔槹木の圖左の如し

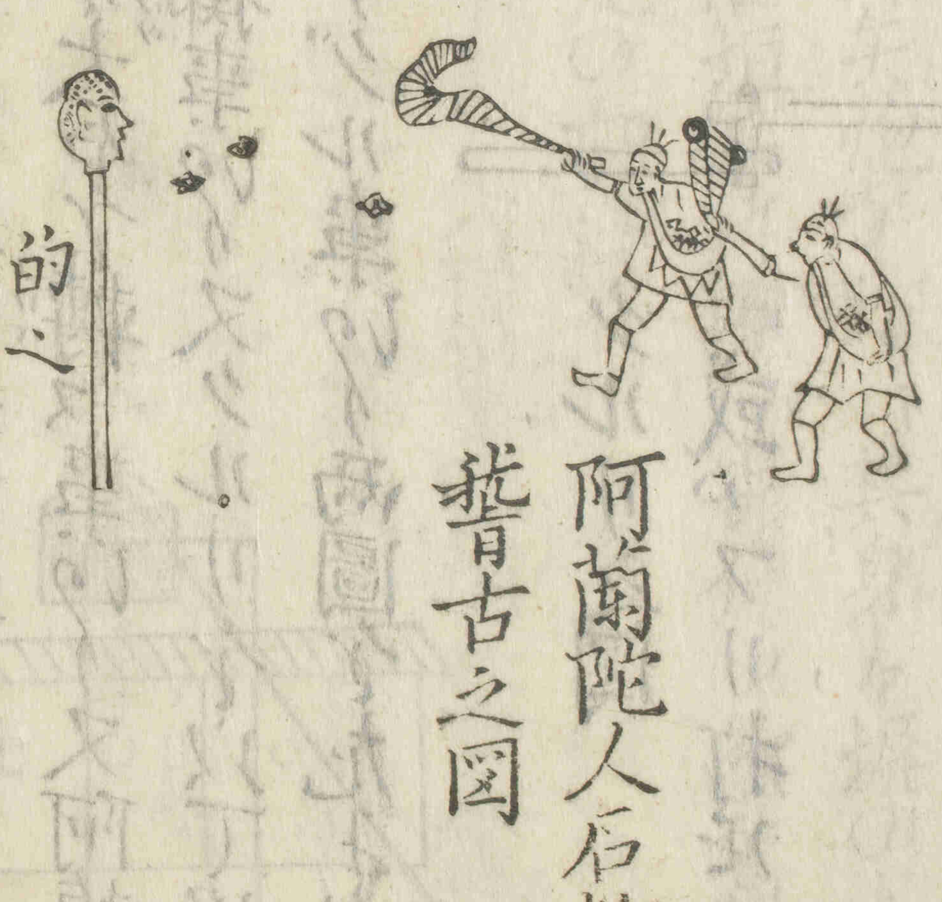


○石を弾ク具ハ則第一巻水戦の條ニ其圖を出ス又山城ニハ大石を轉（コロバ）ス車ハ則又阿蘭陀流ニ手自（テツカラ）石を擲車（ナゲクルマ）ハ則又クルリを以て塀石垣江附人を打ナグル車ハ則両圖を左ニ出ス



クルリ之図

或ハフリ打ト云



阿蘭陀人石擲
稽古之図

右守具の大槩、猶武備志兵衡鈐録ケ上レ
イキスブツク等見合て新制あるへし

○籠城の時城下近郷（キンガウ）の民屋（オク）（イエ）を悉ク焼拂ヒ又攻具ニ成（ナル）へき材木鉏鍬（スキクハ）の類をも悉ク城中江取入レ又井の内江穢物毒物等を打入レて寄手ニ事欠れは事もゆはかり異國ニて是を清野の術ト云之

○又異國ニ堡ト云て城外六七里（但シ日本の道ナリ）所ニ陣塁（ヤウガイ）構を設置て籠城の時、城外の人民の

隠レ所トもなき事なり面白キ法なれども日本の氣象にてハ行ヒ難ク思ヘル故詳なる事ハ不記之然ト云ども志あらバ漸〻に制せるも失政と云にハあらざれバ可考

○國中に國王の倉廩（コメグラ）又ハ大社大寺等あるものハ平生心を用て普請を加置て軍事ある時ハ出張（デバリ）の要害に致スへし

右の次第にて籠城の支度大槩事足ル之

猶和漢名將の籠城の方畧を見聞して工夫ぞ附へし扨又此上に大事のハ心得なり

都て籠城に及フ歟又ハ度〻軍を仕損じでハ将士どもに心氣鬱屈（ウツクツ）して不伸（ノビ）もの之心氣伸ざる時ハ軍ハ云に不及普請、防術等迄果敢（ハカ）〲敷仕難きものなれど將為る者此所を能呑込て自身ハ云に不及士卒諸軍に至ル迄力を不落（オトサ）様に取はからう事兵士を提ル人の機轉器量なるべし

漢の高祖ハ項羽ト七十三度戰レ内七十

二度負（マケ）て七十三度目に項羽を滅したり然ルに七十二度は負、八ヶ年の間、少モ心氣を落したる事無して終に飛龍の業を成就しかへつて又義経没落して奥州江下ル一路（ミチスカラ）、主従ともに欝氣して力も脱落したるに只、弁慶の、時々狂言を発して人を笑ハせ又ハ若輩（ジヤクハイ）などに口論を仕出して人氣を引立などして危き道中を難なく奥州迄到着したり是ぞ弁慶が智識たけにて大切の所を能呑込たる故如此狂言狂行を為たるハ一通りの勇僧トのミ思フ事勿レ可貴

第十二終

110X
159
3